

LIVEROUNDAABOUT JOURNAL 2011

# JPN2.0

PLAN FOR  
REMODELING  
THE JAPANESE  
ARCHIPELAGO

LIVEROUNDAABOUT JOURNAL 2011

## 特集: Special Feature 列島改造論2.0

DECEMBER 3 2011 13:00-20:00 at LIXIL:GINZA

Credit | [企画・編集] 藤村龍至 / 山崎泰寛 | [編集協力] 伊庭野大輔 / 藤井亮介 / 松島潤平 / 本瀬あゆみ / 刈谷悠三 | [デザイン] 刈谷悠三

1 P.02,15 → ART and ARCHITECTURE REVIEW INTERVIEW ...  
P.06 → LECTURE | P.09 → DISCUSSION\_2  
P.10-13 → FINAL OVERALL DISCUSSION

2 P.02,15 → ART and ARCHITECTURE REVIEW INTERVIEW ...  
P.07 → LECTURE | P.09 → DISCUSSION\_2  
P.10-13 → FINAL OVERALL DISCUSSION

3 P.04 → LECTURE ...  
P.08 → DISCUSSION\_1  
P.10-13 → FINAL OVERALL DISCUSSION

大野秀敏 / 八束はじめ / 豊川斎赫  
Hidetoshi Ohno, Hajime Yatsuka, Saikaku Toyokawa

4 P.05 → LECTURE ...  
P.08 → DISCUSSION\_1  
P.10-13 → FINAL OVERALL DISCUSSION

5 P.08 → DISCUSSION\_1 ...  
P.09 → DISCUSSION\_2  
P.10-13 → FINAL OVERALL DISCUSSION

6 P.08 → DISCUSSION\_1 ...  
P.09 → DISCUSSION\_2  
P.10-13 → FINAL OVERALL DISCUSSION

中島直人 / 吉村靖孝 / 西沢大良  
Naoto Nakajima, Yasutaka Yoshimura, Taira Nishizawa

7 P.03 → INTRODUCTION ...  
P.08 → DISCUSSION\_1 | P.09 → DISCUSSION\_2  
P.10-13 → FINAL OVERALL DISCUSSION

8 P.03 → INTRODUCTION ...  
P.08 → DISCUSSION\_1 | P.09 → DISCUSSION\_2  
P.10-13 → FINAL OVERALL DISCUSSION

南後由和 / 藤村龍至  
Yoshikazu Nango, Ryuji Fujimura

EDITION  
LIVE  
ROUNDAABOUT  
JOURNAL  
2011

web  
[公開版]  
ROUNDAABOUT JOURNAL

editor in chief: ryujifujimura, saikakutoyokawa  
editors: hidetoshi ohno, hajime yatsuka,  
naoto nakajima, yasutaka yoshimura, taira nishizawa,  
yoshikazu nango, ryuji fujimura



1960年代から70年代にかけて、多くの建築家や政治家たちによって提示された日本列島の将来像は、高度経済成長という社会背景のもと紆余曲折を経てさまざまなかたちで具現化されてきましたが、経済のグローバル化と人口減少社会の到来という現在の社会的状況においてそのコンセプトを全面的に書き換える必要に迫られているといえます。そこでここでは、私たちの生きる都市空間の設計思想を振り返り、2011年以後の新たな都市設計のために必要な想像力について、討論します。

日時=2011年12月3日[土] | 開場=12:00 | 開始=13:00 | 終了=20:00 | 会場=LIXIL:GINZA 7F クリエイティブ・スペース[受付 8F] | 定員=100名[申込不要・当日先着順] | 入場料=1,000円  
主催=TEAM ROUNDAABOUT | 協賛=株式会社 LIXIL | 協力=東洋大学藤村研究室 | 関連URL=www.round-about.org  
お問合せ先=藤村龍至建築設計事務所[担当=沼野井] | TEL: 03-3476-6508 | FAX: 03-3476-6509 | E-MAIL: press@ryujifujimura.jp | URL: www.ryujifujimura.jp

INTERVIEW 01 | First Appearance: ART and ARCHITECTURE REVIEW APRIL 2011 | <http://aar.art-it.asia/fpage/?0P=backnum&year=2011&month=03>

## 縮小社会が描く都市モデル 大野秀敏

大野秀敏氏と東京大学大野研究室は、わが国の人口がピークに達し、増加から減少へと転じた2005年に、縮小時代の都市モデル「Fibercity」を発表した。ここでは、1970年代以後展開された東京をめぐるデザインサーベイから「Fibercity」へと至る経緯、さらに「縮小」を現代都市の設計に応用するための戦略について、展望をうかがった。聞き手=藤村龍至

### ずっと「都市」の語り方を考えあぐねていた

**藤村** | まず「ファイバースィティ」「シュリンキング・ニッポン」の背景をお伺いできればと考えています。大野さんは東京大学の声原研究室を出たのち、横事務所に入られて、「見えがくれる都市」のリサーチなどに関わられた後、2000年以降に「ファイバースィティ」へと繋がる都市モデルの構想を展開された経緯があると伺いました。東京に対するリサーチから国土全体の「縮小」を考えるようになったそうですが、どのような経緯があったのでしょうか。

**大野** | 私の学生時代は1968年から始まっています。ご存知のように68年は政治的な時代で、大学や専門分野のあり方が根源的に問われた時代でした。私は地方出身の大学1年生で右も左も分からない状態でしたが、様々な影響を受けています。丹下健三先生は大学にまだいらっしゃいましたが、国内で旺盛に活動される時代は過ぎていて、産油国の仕事が始まった時期です。非常に屈折した時代だったと思います。

一方、今日にも見られるような伝統的な建築を見直そうということで、デザインサーベイやそれに繋がる地域性やコミュニティというような問題に関心が高まってきました。私も卒論では先輩達がやったデザインサーベイの研究をして、ずっと都市について考えたいと思っていました。それまでのようにオプティミスティックに未来を語れる時代ではなくなってきたので、

その語り方を考えあぐねていたのです。横文彦先生も都市デザインに非常に強い関心を持っていらっしゃいました。丹下先生のようなメガストラクチャー的な思考とは別に、「グループ・フォーム」のような建築の粒だちを尊重した、ある意味では市民主義的なニュアンスを持ったメッセージを建築の実作でも発せられていましたし、本もたくさん出されていました。当時、横事務所にはアーバンデザインのセクションがあり、組織体制も建築と都市を同時にやるんだということをはっきり示されていました。当時そういった建築家は横さんだけではなかったのですが、私の中では一貫して都市デザインや都市計画など、都市との関わりが気になり続けていました。

オイルショック後に日本経済が復興して、80年代のバブルまで繋がっていきます。ちょうど横事務所をやめた時と東大の助手への就職が重なりました。その時期に事務所も作って設計活動を始めた時期に、バブルの時代が来ました。世界中の資本が集まって来て、都市の変化や開発の規模が個人の建築家が手を出せるようなものではなくなってしまう、都市デザインについては一歩引いて眺めていました。横研究室でも近世の都市の研究に助手として参加していました。

### 2000年を過ぎて「都市」に空隙ができた

**大野** | ところが90年代になってバブルが崩壊し、ただだんそれまでの勢いが弱まってきました。学生時代から都市への関心を持ってきて、建築家があまり都市のことを言わないままです、敷地に対してばかり発言する状況に何か示したいとも考えていました。

その頃、出身地の岐阜県で長期計画を考える時期ではないかということで、東の若手の職員を集めてもらって勉強会をやりました。それと平行して、建築学科から新領域創成科学研究科環境学専攻(当時、現在は環境学研究系)に移ったので、亡くなった北沢猛さん(東京大学大学院都市工学専攻・当時)と今は立命館大学にいらっしゃる及川清昭さん(新領域創成科学研究科環境学専攻・当時)の3人で「東京 VISION」という研究会を作りました。いずれも都市の将来像を考えることがテーマでした。2000年を過ぎて潮目が変わって、今までのデロボーパなど資本の中にあつた「都市」が、利益も減って、少し空隙ができた感じがしました。

**藤村** | 2005年に「ファイバースィティ」を提唱されますが、最初に東京を対象にされたのはなぜでしょうか。

**大野** | 丹下先生の「東京計画1960」があったこと、横研究室ですと東京をフィールドに研究してきた布石もありました。2001年に縮小時代への問題意識があったので、大学で「引き算1回、足し算1回」という課題を出しました。今までは新築の建物を作るなど、「足し算」が基本だったと思います。これからは鉄道路線と住く地形成が絡み合っていますよね。欧米の都市が駅前にも何もないことに比べて、日本の都市の郊外には駅前に商店街がある。あまり指摘されませんが、駅前商店街は東京の大きな特徴で強みでもある。これらの「線分」が都市の骨格につながっていくと思います。

### 横さんの置き土産だった「線分」というコンセプト

**藤村** | 「ファイバースィティ」の特徴として、あらかじめ全体像を示さないこと、線上の計画であること、モビリティを問題にされていることなどが挙げられます。特に「線分」というコンセプトについては、「点」と「面」に分かれていた都市計画の手法を弁証法的に統合している、元国土交通省の竹内直文さんも指摘されています。これらの特徴はどのようにして導かれたのでしょうか。

**大野** | 横研究室では、現代東京と近世東京が研究の対象で、それらを中心に卒論や修士論文を指導してきました。そういった研究から分かって来たことは、昔から言われるように、日本には広場がなく、道から始まって、経路性であるとか「線」的な要素が伝統的に卓越しているということです。横先生が退官される頃、そういった研究をまとめようとしていた時に「線分」という概念がどちらともなく出てきました。「線分」でどうやって都市計画を作っていくかと考えるときに、横先生とのコンセンサスのひとつに、「メガストラクチャーのような大きなスケールで物事を決めて演繹的に考えていく方法は採らない」というのがありました。でも、細かい「線」を都市スケールでどうまとめると、はなかなか思い浮かびませんでした。1989年に横先生が退官されて、その「線分」というコンセプトが置き土産となっていました。もうひとつは、私は岐阜出身で、東京と地方都市の違いとして郊外の鉄道があることが挙げられると思います。東京では鉄道路線と住く地形成が絡み合っていますよね。欧米の都市が駅前にも何もないことに比べて、日本の都市の郊外には駅前に商店街がある。あまり指摘されませんが、駅前商店街は東京の大きな特徴で強みでもある。これらの「線分」が都市の骨格につながっていくと思います。

### 「既存市街地」に「線分」で介入する

**大野** | コルビジエの提案など、誰でも知っている20世紀の都市計画は、基本的には「ニュータウン」を作る技術です。1920年代は産業革命によって、人口が増えたこともありましたが、戦後は戦災復興の需要がありました。いずれにしてもニュータウンに代表される新市街地をどう作るかのセオリーだった。ところが1968年以降に生まれて来たのは「既存市街地をどうするか」という問題でした。68年はフランスだとモンパルナスのタワーの開発が批判されて、パリの旧市街はそのようなタイプの都市開発はしないということが決められた年です。日本では都市計画法が改正されました。私たちが間でも、既存市街地をもとに

都市をどうしていくかを考えることが徐々に芽生えて来ていました。そうすると、全面的にクリアランスする新都市型の計画ではなくて、既存市街地の中に「インターベーション(介入)する」ことが具体的にイメージされ始めてきました。当時「intervention」は欧米系の論文にしか出てこない言葉で、日本のなかではあまり使われていませんでした。「整備」や「開発」が、都市計画の具体的なアクションのために用いられていました。あるものなかに「介入」していくアクションにとしては、「面」では大きく過ぎて、「点」では弱すぎるので、バラバラな「線分」が意味を持つのではないかと考えました。

### 「縮小」について考え、新たな文化を創造する

**藤村** | 「線分」には一つは東京論、もう一つはインターベーションの方法論の二つの意味があるんですね。他方で、印象的なのは、「ファイバースィティ」のコンセプトが富山市などの地方都市でリテラルに実現されていることです。今後の議論でひとつの論点になると思いますが、八東さんは東京論として「メタボリズム2010」というコンセプトを提出されています。八東さんは世界人口の増加の受け皿として、東京への人口の流入が続くシナリオもありうるとされています。東京と地方都市は基本的にはモデルを分けた方が良いと思いますが、「ファイバースィティ」で示されたモデルは、東京と地方都市に等しく適応されるイメージでしょうか。

**大野** | 具体的に「東京が縮小するかどうか」という問題と、「縮小について考える」という問題は別です。「ファイバースィティ」のプロジェクトでは、前提が八東さんと若干異なります。一方、「縮小」の問題は、人口減少は大きな側面ですがそれだけではなくて、世界的な生活レベルの上昇や地球規模での人口増加によって、一人あたりが使えるエネルギーの量が結果的に少なくなるという問題も含みます。さまざまなものが「縮小」という、頭打ちになつた

→P.15

INTERVIEW 02 | First Appearance: ART and ARCHITECTURE REVIEW MARCH 2011 | <http://aar.art-it.asia/fpage/?0P=backnum&year=2011&month=02>

## メタボリストたちからみる建築家の夢と現実 八東はじめ

八東はじめ氏は現在、芝浦工業大学八東研究室を拠点に、丹下健三やメタボリストを中心とした1960年代の建築家の活動と社会背景に関するリサーチを展開しつつ、現代のグローバル化する都市の状況へと接続するプロジェクト「Tokyo Metabolism 2010」を発表し、森美術館で開催が予定されている展覧会「メタボリズム展 都市と建築」のキュレーションを行う。ここでは、特に1970年前後の建築家と政治状況との関係、密度をめぐる現代都市の設計論への接続などについて、展望をうかがった。聞き手=藤村龍至

### 人口減少社会と東京集中論

**藤村** | 八東研究室では現在、どのような活動が展開されているのでしょうか。

**八東** | ひとつは現状及びこれからの東京、メカロポリスのあり方を探るプロジェクトで、「東京計画2010」という2050年をターゲットとしたデザインワークがあり、またその背景に「ハイパー・デンシティ」という超高密度の建築や都市についてのリサーチがあります。これはタイポロジカルなモデルの構築という理論的な作業だったり、世界の事例を考察したという作業で、Hyper Density, と density のsをcに変換して呼んでいます。「ハイパー・デンシティ」はコールハースのBignessという概念に近い。基本的に量がある臨界量を越えると質的変換

をもたらすという考えがある。そこでは従来内陸の都市で培われてきた建築的概念や手法は意味をなくすと思っているわけ。だからハイ・デンシティじゃなくてハイパー・デンシティ。このモデルの集積としての「東京計画2010」は毎年ヴァージョン・アップされていて、最終形というはない。これはオットー・ノイターの「百科事典」というコンセプトに影響されています。常に補充、修整されて完成されることのない全体像みたいなもの。もうひとつの仕事は1960年代、70年代に今我々がいるような時点をどう予測していたかというリサーチで「逆未来学」と呼んでいます。どういう予想が当たったという予想が当たらなかったのか、今の僕らは知っているというアドヴァンテージがあるわけですが、それはなんでなのか、ということを探っていくと、当時の予想技術という客観的なものだけではなく、それをフレームアップしていた基本的な価値概念が見えてくる。逆未来学を通して当時の社会構造を探るし、ひいては現在我々が持っている価値判断の基準を相対化するのには役に立つのではないかと思っています。さらに、これらのリサーチのもとになる1940年まで遡ったヒストリカルサーベイがあって、それが展覧会及び僕の本に結びついています。ただ、これはテンポラリーな個人の作業ではありません。

**藤村** | 現在ご準備されているという展覧会や書籍ではこういったことを主題とされている

のでしょうか。  
**八東** | 本と展覧会は、ともに僕の仕事です。戦前の日本が中国大陸などに展開した都市計画の実験から始まって、一番新しいプロジェクトはグローバルバズムの時代まで、つまり現在進行中なものまで入っているという、互いに似た構図、構造を持っています。イデオロギーの善し悪しは抜きにしていうと、戦前の「大東亜共栄圏」はあの時代でのアジアレベルでのグローバルイズムの動きで、日本のかつての帝国主義的な進出は、日本の本土では、当時も7000万くらいいた国民を養えないという領土的な問題意識に基づいていたわけですが、敗戦によってそれが軍事的あるいは政治的に果たせなくなり、そうすると本土の中で戦災復興と平行して新しい高密度の都市構造を作っていくを得ない。外に出れないなら空中か海上に伸びていくしかない。それが丹下さんとメタボリズムの都市の実験の条件になったと考えています。これは展覧会の域を超えて上に話した研究テーマにも関連するけれども、その状況は今日本の日本あるいは世界の状況につながっていると考えています。つまり日本の人口そのものはそろそろ頭打ちになっていますけれども、世界の人口はまだまだ増えていくわけで、丹下さんが「1960」を作っていた当時の世界人口くらいがあと半世紀で増えるともいわれる。東京は21世紀の新たな世界的な人口爆発に直結する最前線にならざるを得ない。それを考える上で、丹下さんやメタボリストをめぐる歴史が有効なヒントを提供している僕には思えるのです。

**藤村** | 「Tokyo Metabolism 2010」を初めてと

して、八東さんの一連のリサーチプロジェクトでは東京への人口の集中と高密度化が提唱されていますが、ちょうど同時代的に提出された現代都市の将来像を示したプロジェクトとして、論考でもたびたび言及されている大野秀敏さんの「ファイバースィティ」があります。おふたりは対比的なヴィジョンを持たれていますが、八東さんは大野さんのプロジェクトをどのようにご覧になっているのでしょうか。  
**八東** | 「ファイバースィティ」の元になった「シュリンキング・シティ」は地方都市での出来事です。基本的には、それは悲劇的なことであって、重要ではないとは思いませんが、東京も同じようにシュリンキングしていくとしたらどうなるか。「東京計画1960」の頃の日本の人口は9000万人くらいですけど、外から移民を受け入れない限り2050年ぐらいいは同じくらいに減るともいわれています。しかし、頭数は同じでも世代構成が全く違いますが、かつてのよくな社会的な活力は全く期待できない。そうすると9000万の人口も恐らく養えずに、日本は壊滅的な状態になるのではないかと。「シュリンキング・シティ」は皆そうでしょう?現実社会をある一定のレベルに維持していくには何らかの対策が必要になるはずですが。牧歌的にスローダウンするとかは考えられない。東京の夕張化なんて見たくもない。「ファイバースィティ」がそのような都市状況の計画なのかどうか。そこは僕には見えないところですよ。

### 田中角栄の分散論と丹下健三の集中論

**藤村** | 八東さんは、1960年代のメタボリスト

達のヴィジョンが、その時示されていた特殊解と全く同じかたちではないにしろ、現実の社会にリテラルに実現していると指摘されています。その象徴として埋め立て地に高密度な都市が実現した豊洲と浦安をあけておられますが、他方で、富山市ではLRTを中心としてコンパクトな都市への再構成が進んでおり、大野さんの「ファイバースィティ」がリテラルに実現しつつあります。このように現代の日本の国土を見渡した時には、東京では八東さんのいう「Tokyo Metabolism 2010」的な「豊洲モデル」が実現しつつあり、地方では大野さんのいう「ファイバースィティ」的な「富山モデル」が実現しつつあります。その状況で60年代と現代を比較したときに、今、日本の国土計画の全体像みたいなものはどのように構想し得るでしょうか。  
**八東** | 今の建築家たちにはまるで関心のない領域です。残念ながら、ご存じの通り、全国総合開発計画も5次までで終わってしまいました。日本が国家としての獲得目標を見失ったということです。丹下さんやメタボリスト達がそのようなヴィジョンに突き動かされていたかと思いますが、全く逆調したかという点必ずしもそうではない。全総はやはり分散論なんですね。その延長上に田中角栄の「列島改造論」があった。自由民主党が中央で強大な権力を持ちながら選挙基盤は地方にあったからですけれども、それに唯一異議を唱えて集中論を唱えていたのが丹下健三だというのが僕の見方なんです。今でも僕が悪逆で分散一番みたいな見方が無媒的に是とされている風だけれども、列島改造が実行された結果日本がどうなったかと

→P.15



# JPN20

PLAN FOR  
REMODELING  
THE JAPANESE  
ARCHITECTURE

INTRODUCTION

TEAM ROUNDAABOUT JOURNALを主催しております藤村と申します。今日は一日宜しくお願い致します。

最初に今回のイベントにつきまして、簡単にご紹介させて頂きたいと思います。私共TAEM ROUNDAABOUT JOURNALは、2007年くらいから建築と都市の関係であるとか、建築家と社会の関係をなどをテーマとして参りました。当初から、ROUNDAABOUT JOURNALというフリーペーパーを作成し、メディアを意識した活動をしています。その中で、1995年以後の建築、それから1995年以後の都市というテーマを設定致しまして、最初は時代認識を共有する所から議論をスタートしました。今日モデレーターをつとめて頂きます南後由和氏とは、そういった中で対談させて頂きました。このLIVE ROUNDAABOUT JOURNALというイベントは、2008年から始めまして、ライブで文字を起こし、編集をしてメディアを制作し、そのプロセスを共有して頂くというイベントです。その後も、漫画家の方に絵にしてもらう試みですとか、出張して様々な場所で議論の場を作るとか、様々な拡張をしていますが、イベントのホームグラウンドとして、このLIXIL:GINZAで年一回のライブイベントは継続して行わせて頂いてきました。近年では、このイベントの方法論を実際のワークショップに適用したりなどする試みも行っていて、設計のプロセスと情報発信のプロセスを一緒に考えて行くということが課題にもなっています。

さて、今日のテーマでもあります、列島改造論2.0というテーマのアウトラインを簡単に紹介させていただきます。

今日は、「日本の戦後の都市計画」そして、「その中にある政治と建築の関係」に焦点を絞って議論を展開していきたいと思います。まず、議論のフレームとしてある枠組みを提示しておきたいと思います。社会学者の大澤真幸さんは、戦後1945年以降1970年までに一つ区分を設けて、その間を「理想の時代」1970年以降を「虚構の時代」という様に分類しました。そして、東浩紀さんは1995年にもう一つの線が引けるのではないかと仰いまして、1995年以降を「動物の時代」と区別されました。このような区分による戦後の社会状況の理解は、そのまま建築や都市の議論にも展開可能だと考えられます。

まず、1945年から1970年までの「理想の時代」に対応する建築のあり方は「都市の時代」と言えると思いますけど、ここまでは都市計画や合理主義を重視した設計の方法論が議論され、そこからメタポリズムといったようなムーブメントが生まれました。1970年以降1995年までの「虚構の時代」では、磯崎新さんが「都市からの撤退」と言い、篠原一男さんが「住宅は芸術」と言い、安

藤忠雄さんが「住宅は抵抗の拠点である」と言ったように、建築家の議論の主流の一つが、住宅にシフトしていきました。そして1995年以降「動物の時代」には、「身体の時代」とも言うべき、感覚や身体感覚に根差した建築の形態であるとか、プリミティブな感覚に対する研究であるとか、細かな差異を元にした、マテリアルに特化した建築の構想の仕方みたいなものが、設計のコンピュータライゼーションと連動するように、身体性が逆説的にうかがいあがってきたと言えることができると思います。

各時代に求められる建築家像が、「都市デザイナーとしての建築家」から「住宅デザイナーとしての建築家」が主題だった時代を経て、他者無しでマテリアルに向かい合うという意味で「職人的な建築家」像が続いてきたと言えると思うのですが、ここで問題としてあるのは、1995年以後の「動物の時代」あるいは「身体の時代」における「職人的な建築家像」がこのまま続いていくのだろうか、つまり続いているのではないかと、ということなんですけれども、特にこの2011年に強い線が引かれたのではないかと考えておりまして、つまり、かつて「理想の時代」「虚構の時代」には、都市を巡るさまざまなトピックがあった中で、「動物の時代」には情報化、郊外化、地方分権という話題が出てきたわけですが、その中で「縮小社会」「エコロジー」「新しい公共」「パートナーシップ」「コミュニティ」といったトピックの中で、建築家像は一つの転換を迎えているのではないかと考えております。特に、「縮小」「エコロジー」「新しい公共」などと言った、コミュニケーションの下部構造を説明する「アーキテクチャー」の存在が際立っていると考えております。ここで言う「アーキテクチャー」とは、ボトムアップであるとか地域主義であるとかアルゴリズムであるとかこうしたものを司る。カタカナの「アーキテクチャー」、経営工学であるとか情報工学であるところの「アーキテクチャー」であります。その、「アーキテクト」としての建築家というのが、今後、時代に求められる建築家の姿ではないかと考えておりまして、従来の建築家と区別する意味で「アーキテクト2.0」と言えるのではないかと考えてます。このように「アーキテクト2.0」的、建築家像を念頭において都市の問題を見返した時に、田中角栄という人が浮かび上がってくると思います。田中角栄は政治家ですけども、実は、最も有名な建築家ではないかと思っております。彼は、田中土建工業というゼネコンを経営していましたが、その前に田中設計事務所という設計事務所も経営していたという事実もありまして、空間をメタファーとした政策の提示が非常に目立っていたと思われれます。そこでは、例

えば、表日本と裏日本というような格差を表現するのに、三国峠をダイナマイトでぶっ飛ばせば新潟に雪が降らなくなるというような発言もありまして、その様な空間をイメージして考えることによって、国土計画という日本の国民の全体に関わる国土の問題を 이슈にするということのようなことをなしたのでないかと思えます。「列島改造論」には当時の地方と都市との格差、特に太平洋側と日本海側であるとか、あるいは太平洋ベルト地帯とその他。四国エリアや東北との格差の問題を交通インフラの整備によって工業化していくという様な構造的なビジョンがあったのではないかと考えております。「列島改造論」で論じられた内容を、東京とその他の地方都市の格差の問題。そして、その問題に情報を加えたときに何が起こるか、といったような形でこの「列島改造論」のバージョンアップがはかれるのではないかと、あるいはその様な大きなビジョンを持ったイメージについて、議論して行きたいと思います。

さて、本日のトークイベントの構成ですが、セッション1は歴史編として、まず歴史の認識として日本列島はいかに設計されてきたか。あるいはそのいかなるデザインが提案されてきたかということに焦点を当てたいと思っています。中島直人さんと豊川斎赫さんにご登壇頂きまして、それぞれ1920年代の石川栄曜、1960年代の丹下健三、もしくは下河辺淳といった建設官僚達の動きをレクチャーして頂きたいと思います。

セッション2は議論編として、今日以後の、縮小社会、超高齢化社会を迎えた日本における将来像について考えて行きたいと思います。今日の社会状況をもとにして都市的な提案をされている代表的な建築家でいらっしゃる大野秀敏さんと八束はじめさんにそれぞれのビジョンを提示して頂きたいというふうに思っています。

そしてセッション3は戦略編として、そうしたビジョンや歴史認識をある一つのストーリーとしてどのように共感していくことができるのか、ということをご議論して行きたいと思っています。

最後に、本日モデレーターをつとめて頂きます南後由和さんをご紹介をさせて頂きたいと思います。南後さんは1979年大阪府に生まれ、社会学、都市建築論を専攻していらっしゃいます。東京大学の大学院を終了されて、東京大学大学院の情報学科の特認講師を現在務めていらっしゃっています。今回に限らずLIVE ROUNDAABOUT JOURNAL では歴代の司会をして頂いたり、コメントーターをして頂いていますが、今日も南後さんの視点でモデレートして頂ければと思っています。

宜しくお願い致します。



LECTURE 01

# 「建築家」の 構想力 想像力ある 官僚制と アカデミズム

豊川 斎赫 | Saikaku Toyokawa



丹下健三と下河辺淳の相克を軸に、  
主権の制限、  
生存権の制限を  
せざるを得ないのではないかと  
都市計画の本質に触れ、  
「福島計画2060」を披露する。  
その根拠に注目したい。

豊川 | 丹下さんと下河辺さんの話をしてほしいという3月の依頼が、震災のために9カ月先延ばしになりました。その間、10月に建築学会で「3.11以後の日本」という展覧会の企画もありました。国土計画について、書籍が出ていないこともあり、21世紀の建築家にとってはほぼ死語に近い状況で、このような依頼が立て続けにきたのが意外でした。10月の展覧会では、丹下研究室が戦災復興から高度経済成長、そして70年万博にいたるまでいかに国土や都市に関わろうとしたかを展示した。最後には浅田孝に触れて、先人たちの貴重な経験が「3.11以後の日本」にどのような未来を照らすのか、豊川なりの都市ビジョンを描きました。

まず、平和記念公園について丹下が雑誌に掲載した文章を紹介します。

—

「たしかに、都市復興の建設はすべて行きづまっている。(中略)都市計画が危機であるのではない、むしろ、このような構造的危機の様相を示している現実を見きわめることをしないで、単に無構造的な白紙をまえに鉛筆をもって臨んだ都市計画家の幻想が、いま動かすことのできない現実をまえていて危機感におのっているのである。」

非常に熱い文章です。3.11以降の震災復興が進まない現状を考えると、日本の都市計画はこの60年間何をしていたのか疑いたくなる一節です。

丹下研究室が戦後の都市計画に対しての申した第一の点は、石川栄耀的な分散論にNOを突きつけ

ることでした。「住みやすいまちをつくる」ということは、バランスのとれた生活圏を衛星都市として配置して行くことにつながります。しかし、丹下にとっては許せない。国民所得の増大と安定を実現する手段として都市計画がある。そのために生産量を増大して生活水準を上昇、生産と生活を止揚する場として都心=都市のコアをつくる。

コンパクトシティ批判もしている。生産力と人的広がりをつなぐさせる地域開発であり、辛口に石川さんを批判しています。

「石川栄耀氏の都市内における生活圏の構成を漸次広域に及ぼして、全国土の生活圏の均衡を図るという方法論が代表的であり、西山卯三氏、武居高四郎氏等により夫々説があるが、何れも同巧異曲であり、これらの生活圏の構成によって、どの程度の実質的な国民生活の向上が期待できるかは疑問である。」

こういった意見は時代錯誤かもしれませんが、ある種の本質があるんじゃないか。

次に一方の、丹下研究室のOBである下河辺淳について。彼は東大建築学科卒業の官僚で事務次官までのぼりつめました。『列島改造論』の原案作成に一番貢献した人だとされています。卒論からずっと研究していた大きなテーマが、「工業の生産力」をいかにして増やせるか。丹下さんの研究は都道府県別に約50のブロックで生産力を測定しているので50画素だとすると、下河辺さんの研究は1kmメッシュなので日本列島分の38万km<sup>2</sup>、つまり38万画素で日本の生産力を計測しています。それくらい密度が違うと言えますが、発想としての強度が違う。

「東京計画1960」は人口集中を利用するために、東京湾に橋をかけて生活圏とみなし、一千万都市を実現しようとした。これに対して総合計画課の役人だった下河辺さんは、シンポジウムで「2兆円くらいなら出せる」と言って会場をわかせたそうです。下河辺さんは吉田茂から中曽根、さらに民主党政権のブレーンも務めたことがあるほどで、このプロジェクトの問題点と可能性、インパクトを一番理解していた人だっただろうと思います。また、実際に丹下研究室は建物を設計していたわけで、建築と都市、国土をつなぐモジュールの発想を重視していた。建築から国土までシームレスにつないでいく数学的な論理を思考の根幹に置いていたと考えられます。

次は「東海道メガロポリス」について。丹下さんは1960年に代々木第一体育館を竣工させた同じ年の冬に「東海道メガロポリス」を発表します。皇居から木更津に軸線を通す東京計画1960と同じように、中心地は同じ東京ですが、そこから日本が投資すべき場所の特定を急いだ。当時、下河辺さんは全総計画を担当して、地域間の所得格差を解消するために、秋田や仙台、九州などに港湾開発をしましたが、丹下さんは、公共投資は一極に投下しないと非効率だと考えた。この案は不採用でしたが、建築家が日本のあるべき未来、将来を雄弁に語ったという意味で非常に重要な試みでした。

丹下さんは、日本初の国土開発地図と、諸分野の専門家のコミュニケーションツールの開発もしました。ハーバードとMITの研究共同体に感化されて、社会科学の専門家が集って都市問題に対抗する組織を作ろうとした。結果として東京大学都市工学科や地域開発センターができた。国土開発地図は、地

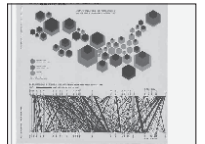
理学者の木内信蔵と共同で作成された。丹下さんは、美しいグラフィックによって、議論を円滑に進めるための共通言語を整理することも建築家の仕事であると見なしている。データや知見を取りまとめて整理して結晶化するのが、建築の本義。国土の隅々まで、建築家が理解できるように変換していく作業だったと思います。

もう一つ、浅田孝さんの、国土と建築と放射線を結ぶもう一つのモデュールについて。

浅田さんがこれをまとめた背景として、原爆が投下され都市が消滅したという経験があったのでは。このスケールに沿うと、10のマイナス6乗のスケールで起きる原子同士の衝突が10の5乗のスケールの都市を消滅させた。つまりこれまでの建築スケールではもはや対応不可能であり、建築を取り巻くあらゆる事象に興味を持つほかない。これをポジティブにとらえれば、10のマイナス6乗で新しく分かった知識を都市スケールに応用して、新しい都市ビジョンを打ち出したってよいのではないかと。そういう姿勢で提案していくのがアーキテクトとしてあるんじゃないか。こういった図版は、なかなか他の建築家では提出できなかったのではないかと。

最後に、展覧会で出した「ゼロポビュレーションシティ」について。丹下研究室の理論を、現在の福島の問題に置き換える。東京計画1960は居住しがたい海上に橋を架けて、生活圏として開発する案でした。福島計画2060は居住しがたい陸地の道路を寸断し、生活圏として半世紀断念する案です。福島の避難区域は東京湾とほぼ同スケールの900km<sup>2</sup>ですが、避難区域に沿って幅5mの堀を巡らし、道路も橋もすべて落とす。避難区域内はサファリパークとして環境調査エリアとし、避難区域以外は除染して、生存圏として成立させる。八東さんのハイパーデンシティは2千万、3千万都市を目指し、大野さんのコンパクトシティは30万都市を目指すのだとすれば、豊川は限界集落への対策も視野に入れて人口0の都市計画を考えたい。避難区域に戻ろうとしている人々の多くが現状では年配の方で、いわゆるこの3世代はこの避難区域から離れようとする現実がある。

下河辺さんと田中角栄が袂を分かった理由は私権の制限だと御厨屋さんがおっしゃっている。昨今の都市計画は言い換えれば「まちづくり」。しかし、都市計画は国家による私権の制限だと言い切れないといけないのではないかと。3.11を踏まえると、地方分権を進めつつ、いざというときには私権の制限、つまり生存権の縮減を進めるしかないんじゃないか。ゼロポビュレーションシティは、限界集落の問題のテストケースになりえる、豊川流の「列島改造2.0」です。





LECTURE 02

# 生産と消費を架橋する「生活圏」都市構想

中島直人 | Naoto Nakajima



今、1920年代以降を語るというのは、  
どうことだろうか。  
中島氏は、全体主義的な雰囲気か  
色濃い時代に、  
計画による合理化によって  
生産性を最大化する時流の中で、  
商店街を最小単位とした生活圏を  
重視しようとした石川栄耀を語る。

中島 | 私は都市計画をやっておりますが、今日お話しする石川栄耀氏も都市計画家です。出身は土木ですが、アーキテクトに近いような仕事をされた方です。彼の戦略を理解するための参照軸をご提供できたと思います。

今、名古屋で若者たちが創造力を発揮している一番カッコいいスポットとして「中川運河」というところがあります。もともと運河沿いに倉庫が並んでいる場所で、しばらく使われなくなって久しかったのですが、アート等いろいろな活動に利用され始めています。彼は名古屋で10年近く都市計画をやっていて、戦前の1920年代にその中川運河という港から貨物駅までを結ぶ工業運河を作りました。

「区画整理」という、市街地を作る以前に郊外で道路や公園を作ったりする事業がありますが、当時の都市計画の議題は、工業地帯と郊外の住宅地をどう作るかということでした。そこで大きな功績を残された人です。東京では、彼は「コマ劇場前広場」という歌舞伎町の広場を作りました。また「パティオ十番」という麻布十番の中心にある道路に囲まれた公園を作っています。実際には広場だけでなく、戦災復興で区画整備する時にいろいろなことを考えて実践した人です。上野の不忍池では、戦時中は田んぼになっていたのを埋め立ててプロ野球のチームの球場が作る計画に地元の大反対があったのですが、石川栄耀はそのとき東京都の都市計画課長さんで、その反対の声を聞いて中止しています。その際、水上音楽堂を住民にプレ

ントしています。

埋め立て中止の一方で、銀座の周辺を巻いている東京高速道路を、戦災後の瓦礫でお堀を埋めて作ります。東日本大震災でも問題になっていますが、当時の東京は瓦礫を移転するお金がなかったために、汚染されていたどぶ川を埋め立ててショッピングセンターや駐車場、その上に高速道路の建設を行いました。川を埋め立てたというある種のグラウンドデザインによって戦後の建築が建っていく地盤を作った人です。

彼は技師として名古屋や東京で仕事をしていますが、基本的には内務省という今の建設省や国土交通省の役人で、特に1941年—1944年の間にたくさんの本を出しています。当時は国防や戦争に関する本が一般的で「日本国土計画論」や「国土計画」、「生活圏の設計」といった当時の全体主義的なイデオロギーに同調して国土計画を話題にしています。現代の評価は分かりませんが、今日は「石川が提唱した国土計画論は何だったのか」をお話することが私の役割だと思います。

戦後には「開発」と言われましたが、いわゆる「国土計画」は1940年代前半に集中しています。石川栄耀の本も年間1、2冊ほど出ていました。とはいえ60年代にも国土計画の本は出ていて、全国総合開発計画5回にわたって議論になっており、国土計画が国の活動として注目されていきます。しかし当時の主流である「国土を合理的に資源化するのか」という話とは違い、石川栄耀のスタンスは生産と消費という、この後の国土計画全体を貫く二つの考え方を持っていました。戦時中は生産の側面が盛り上がりましたが、石川は消費、人間生活の部分を考えなければならぬと思って国土計画を推奨していきました。彼の言葉に、「生産だけを考えたら人口の問題は生産人口だけのものになってしまうが、人間というのは生産力が無くなっても生き続ける。」というものがあります。人間生活を生産過程の偶然に任せるのではなく、生産に先行して計画する。その上で、生産と結びつくと国土計画を展開していこうと主張しました。

彼の国土計画論の視点として、「国土計画」と「地方計画」と「都市計画」という三つの言葉があります。「国土計画」は1940年—1944年に出てくるわけですが、「都市計画」は1919年に法律が出来た前後に言われ始めてから1924年に関東大震災が起きた後の「帝都復興」でメジャーになり議論されていきます。もう一つの「地方計画」と呼ばれる、英語で言うところの「リージョナルプランニング」も重要です。

「都市計画」は、当然一つの都市が周囲の都市を巻き込みながら「メガロポリス」—当時のメトロポリスのように大きくなっていくので、広域的に都市を考えていくという動きがありました。1924年のアムステルダムで国際的に議論される会議に彼も参加して、その影響を受けてもっと広く考えていこうという考え方を持っていました。それは市町村でも県でも国でもないというレベルの話なので、実践する主体がずっとなかったんですが、「国土計画」が1940年代に出てくるときに、「地方計画」が都市と地方を繋ぐ一つの手段として再び注目されてきました。

それは都市計画家であれば普通の道のりで、都市から始まって地方計画、そして国土計画に到達しますが、この道筋で国土計画を論じた人は当時いませんでした。経済の側面からですと最初から国土の合理的な体制を考えるので、地域、地方、都市はトップダウ

ンのに連携していきますが、基本的に石川栄耀が考えているのはボトムアップなわけですね。

あともう一つ、石川栄耀の重要な視点は、メトロポリスと小都市論者の両方を兼ね備えていたことです。「減びゆくニューヨーク」と石川が文面で呼称したように、彼も大都市主義の問題はわかっていた。「田園都市のような小都市の方が人間にとっては良いのだ」と論じる人もいて、一般的には都市計画家というのは小都市論者と呼ばれていました。石川栄耀も小都市論者と呼ばれますが、彼の本をよく読みますと、実は大小両方を論じたい人だったと思います。大都市の弊害を認めつつ、大都市性の面白さ、文化的な体験の重要性ということも理解しながら、一方で田園都市のような自然に囲まれたコミュニティが形成される都市も求めていました。

そういった二つの考え、生産と消費、そしてその大都市と小さな都市とを結びつけることから考えていくのが彼の国土計画のスタンスです。

1940年代の東北の地方計画では、「生活圏」というものを設定しています。そしてその生活圏には、「日常生活圏」の他、週末に遊びに行く地域や、月に一回行く場所とか、いろいろな生活の大きさ、行動する範囲があって、それらを組み合わせて都市を編成するのが彼の考え方でした。

東北の計画を見てみると仙台と青森を拠点に生活圏を築き、その次の都市、そのまた次に小さな都市、という段階構成になっていますが、彼は調査をして当時の人口分布をもとに理想的な生活圏とのギャップをいかに調整していくかを考えています。

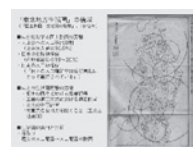
そのときに「生産の裏付け」というものどのように調和を取るかという話になっていきます。生産は工場の立地条件等で決定するある種の計算結果と実際のギャップがあるわけで、どう工場を誘致するか、中心都市の文化を高めるかといったいろんな政策で複雑な人間の移動を計画的に誘導していこうという話です。

今でもこのような都市の生活圏の改装がありますが、石川栄耀が面白いのはそれをどのように実現するかということです。当然今のような話は法律上の計画によってのみで出来るものではなく、人々をある場所へ移動させることは難しいわけです。

彼はそのときに、民間の力、科学的な助言、金融機関等が重要であると考えて、官僚の立場で国の地方計画法というものに携わる際、この時代に東京商工会議所と都庁を合併することで民間が働きかけて、民間側から工場を分散させるような取り組みを行います。当時の日本商工会議所の会長で自民党の政治家だった藤山愛一郎と懇意になって41年—45年にかけて地方都市をまわって工場の受け入れ先を整理したうえで東京圏の工場に働きかけて移転させています。

石川栄耀さんの家に丹下さんも遊びに行く仲だったようですが、二人が対談している1951年の記事で「今の建物は鉄筋コンクリートだから残るけれど、中身が固定され過ぎて社会の変化に全然対応出来ず10年程で持たなくなるのではないか」という石川さんに対して、丹下さんが「ニーズが変わり成長する時代にどう建築を合わせるかと考えている」と応じています。

石川が「お互い楽しく過ごせる都市を作ろうね」といって締めくくりましたが、丹下さんはどのような楽しい人生、都市を作っていたのかということが、この後の豊川さんのお話になるのではないかなと思います。





LECTURE 03

# 縮小社会 という現実 「公共」の 再定義

大野秀敏 | Hidetoshi Ohno



縮小社会を大前提とするとは一体どういうことか。  
移動を基本的人権と考え、  
公共交通のあり方を再定義する。  
新しいものを作っていくよりも、  
すでにあるものの生かし方を考える。

大野 | 基本的な認識として、20世紀までは膨張の時代で、21世紀は縮小の時代です。人口構造が変化して、先進諸国で少子化・高齢化している。資源は、鉱物資源も水も処理吸収能力も含めてですが、一方、地球全体の人口は増えている上にそれぞれが高い成果物を要求する以上、一人あたりに概算すると資源は減りつつある。先進国が過剰生産するという経済構造に90年以降消費社会が出ていて、限界が来ている。これが、日本を代表として今のEU問題も含めた巨額の財政赤字を生んでおり、21世紀は縮小で正解だと言えるわけです。

人口構造を見ると、2055年の日本は9千万人弱で、高齢化人口は40%。これは先進諸国の多くの国と同傾向で、イタリア・ドイツ・韓国などが低下している。例外は、先進諸国ではフランスとアメリカです。ドイツの建築家がまとめた研究では、世界の1/3の地域の国が同じ傾向にある。また、一般的に言われるのは、収入が上がると教育水準が高くなると、子どもを産まなくなるといふ。子どもを産んで労働量を期待するという基本的な形が崩れてきて、教育負担が高騰します。それから女性の自立が進めば人口減少が進む。

日本でも中国のように10%近い成長率だった。私が学生だった1968年くらいはちょうど高度経済成長期の最後だったのだけど、オイルショックでガタンと下がった。それと同時に、不思議なことに出産率も比例しています。人口構造は一国の経済のポテンシャルに大きな影響を与えながらまったく偶然ではない。モダニズムの都市計画は、基本的には人口急増期に合わせて作られた都市計画理論と言えます。コルビュジエのヴォワザン計画(1925年)にしても、東京計画1960

にしても、新都心を計画する技術社会的に要請されていた。縮小期にはこの方法論は適応できない。要するに縮小は、ひとつのピークに達した世界地球文明が立たざるを得ない必然的な流れである。ですから物質的成長しか幸せの道がないとすれば非常に成功しづらい。また、核家族崩壊を話題にした計画理論はありますが、現実とはとくに先に進行している。2030年だと、1人世帯は1/3を超える。しかも日本は非婚者が非常に多い。男子の生涯独身率が1/3、女子が1/4に達する。

自殺も大きな問題です。日本は世界に5番目で、毎年三万人死んでいる。ほとんどが40〜60歳の働き盛りの男性なのが社会的な歪みの現れです。10年間で30万人も死んでいる。震災で2万5千人が亡くなっていますが、30万人に投じられた国費や情報の量を比較するとあまりにも寂しい社会です。

それから、基本的人権としての「交通」を考えたい。行きたいところに行けることがと保証されているのは都市の一番基本的な要件なんです。長岡は一般的な地方都市なんですが、公共交通がだいたい4%。60%が自動車で利用しているんです。ところが首都圏に関しては通勤交通時には3/4が鉄道を利用している。しかし地方都市ではそうではない。今後、地方都市が生き残るためには公共交通の充実是不回避であるということであると考えている。それなのに、LRTなどが非常に軽く扱われているのが日本の特徴なんです。

それと、フードデザート(食料砂漠)という問題があります。歩ける距離に飲食店がなく、食料品も売っていない。車を維持するのは高齢者にとっては非常に大変なこと。しかも身体的に運転能力が下がるときに自動車がないと食べ物にありつけない街が大量にできています。「公共交通は椅子」なんです。

大きな地価の上昇がない日本で、上昇を前提とした都市計画は不可能です。区画整理事業も今後はあり得ない。住宅もあるし、空地が山ほどできる。自動車過剰依存社会と合致して寂しい社会が必然となる。公共サービス=公共建築の図式が成り立たなくなる。

ここで、私たちが提案しているファイバースティについてざっとおさらいをしたいと思います。鉄道に沿ったコンパクト化を進めると、730のコンパクトシティが東京を構成します。それから、防災対策になる。空き地をつないでつくる防火緑地。地価が8%上がればこれができる。緑地が増えるからです。都心の防災線として何も考えられていない。阪神・淡路大震災クラスの直下型が首都圏を襲ったときに、首都高を防災用の救援道路にしようという計画です。それに、地域冷暖房を組み合わせる。それから都市の新名所づくりをする。3000万人の人口がありながら、まともな公共空間がないことに対して、例えば、新宿御苑の境界線を操作することによって、周辺にパークサイドの集合住宅を作って、不動産的な価値を高めて、しかも新宿中央通から御苑が見える。さらに、都内の地域冷暖房や焼却場を首都高のインフラを使ってつなげると、公共圏が、熱に関するインターネットができるという計画もあります。チョンゲチョン的にすべてを壊して美しい景観を作るのは、モダニズムです。私たちは、首都高も東京の地形の一部であり、お茶の水の切り通しも江戸時代の土木構造物ですから、地形として同等だと思っています。

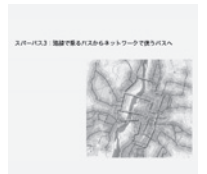
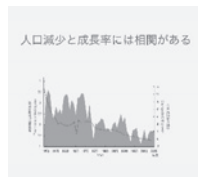
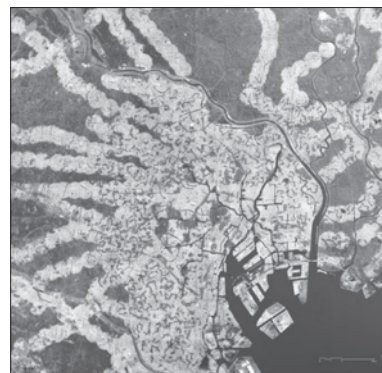
長岡を対象とした、「ファイバー・シティ」の2.0があり

ます。「暖かいインフラ」と呼んでいます。なるべく外部に発信しようとして、車メーカーのminiと展覧会もしました。例えばコンパクトシティというのは、今、日本中の自治体の実際の都市マスに描かれているんですが、誰もあれが本当にCO2を減らすかと計算した人がいない。私たちは計算しました。それから、先ほどの公共交通の充実として、「スーパー・バス」というBRT、つまりバスを利用したものを提案します。中央車線をバスが走るわけです。

一般に、バスは鉄道よりダメだという人が多いんですが、それはバスに全然お金を使ってないからだけなんです。路線として理解されているバスを、地下鉄と同じようにネットワークで乗るためにはどうするか。環状線と支線に分け、運賃システムも変える。

次は「暖かいインフラ2」として、縮小する都市における公共的なサービスの維持です。突然公共施設が閉鎖するなど、QOL(生活の質)が大幅に下がってしまう。それを解決するために、空間とコンテキストの分離を考えます。施設はからっぽにして、コンテンツはデリバリーする。このシステムだと、例えば6つの自治体で共有すれば、公共サービスの維持コストが1/6とか1/7に低下できる。被災地にも派遣できる。サービス=施設ではない発想です。三つ目はコミュニティダイニング。食事の質が下がると生活の質が下がるので、それを保証する。地域の雇用機会としても考えていける。

まとめると、ファイバースティの要素は都市の線的要素ということです。同じ面積の緑地でも、長い方が、パークサイドマンションもたくさん建てられて、同じ投資でより多くのインパクトを都市に与えられる。これまでの再開発計画では、土地がまとまっていなかったという理由で拒否されてしまっ案ですが、都市計画、私たちが提案するファイバースティは既存の都市に対して介入していきます。既存の都市に断片的、線分的介入をして既存要素と共同施設を私空間として質を高めるといふ戦略ですので線的な方法が有利だと。20世紀的なモダニズムの理論をアトミックモデルと呼ぶなら、そういった、線的なモデルが、既存の、つまり21世紀の都市のための理論になる。小さな要素、小さな介入の集合で大きな物語を紡ぐということがポイントです。





LECTURE 04

# 百科事典としての「東京計画2010」

八束はじめ | Hajime Yatsuka



可能態として東京を再定義する  
「ハイパー・デンシティ」などで  
縮小時代にあってメガロポリスを構想する。  
そこに書き込まれているのは答えではない。  
問われているのは、  
可能態を目の前にした私たちだ。

八束 | 先ほど大野さんの発表で面白いと思ったのは、なぜ今「自然」の話なのだと。しかし私たちもなぜ今「超高層」なのだと。自然はモダニズム以前の話です。それに大野さんたちは軽く通っている。一方大野さんが批判されたモダニズムの超高層ですが、私たちはそれに意図的に還ろうとしている。両方ともアナクロですが、実は最先端と最後尾が転換してよく分からない状況になっていると思うんです。

まず森美術館で現在展示中の「メタポリズムの未来展」についてお話しします。50年前は日本人口が9000万人で、世界人口は30億人でした。私は丹下研究室だったので、この時期に出た「東京計画1960」の模型写真を見て暮らしていました。丹下さんは1959年に出された「都市の地域構造と建築形態」という博士論文を書いています。これが元になって東京計画の報告書が書かれて、新建築に出た後、単独のパムフレットにもなっています。前段は博論のリサーチ、そのあとは日本列島改造論や東海道メガロポリスが書かれていて、東京計画が東海道から九州まで伸びていくような国土軸が構想されています。そしてこれから話すのは21世紀における東京計画の30年後の後日談のことです。

メタポリズム展に出したものに、明治100周年に内閣が募集した懸賞文で丹下チームが書いたレポートがあります。これは東京計画の論理が新幹線のネットワークを中心にして日本国中に伸びていくという内容です。もう一つは、下河辺さんと丹下さんが東海道メガロポリスのテーマで対談している1967年の文章です。50年の国土開発法から

始まり第五次全国総合開発計画までの歴史、その間に挟まる主要なイベントや著作です。今新全総とか日本列島改造論というのは環境汚染を全国に分散させて、用がない道路を走り渡らせて、更に地価の高騰まで招いたと一般的に批判されていて、私も70年代に政治家達をメガロポリスマニア(メガロポリスとメガロマニアという言葉を使った造語)と呼んで丹下さんの集中論を批判しました。分割論の新全総や列島改造論も同じ事をやっていたのではないかな。一般的に受け入れてしまっている位置づけというのが当時少なくともメガロポリスを正当に議論する可能性があったのではないかな。これが第一部です。

第二部は世界人口が70億を超えて日本の人口は1億2千万を超えている50年後の現在。グローバリズムの話で僕が大野さんに対比的に扱われるのは好まないんですが、大野さんはグローバリズムの実態に対する認識として「皆縮小している」というお話でした。でも地球全体は増えているのでそうはいきません。現在どんな道を我々が再び迫られているか、というのが第二部での問題点です。

上海には南京、蘇州その他のいろんな町がありまして、各人口は500万や700万。上海は1800万でスイスの人口と同じ、ヨーロッパ最大のドイツでも5000万強、700万弱がフィンランド、アイルランド、デンマーク。ヨーロッパの国人口が中国では都市のレベル、ということは従来の都市の概念では理解できない。

東京は今後成熟したヨーロッパの低密度でいくか、アジア的な爆発でいくか。2050年には現代に対する世界人口がプラス30億、日本の人口は-3000万になります。一方世界は21世紀中ずっと増え続けていき100億まで行くらしい。その時代に起きることは人口の大規模な移動だろう。それを「グローバル・デイスボラ」と呼んでいます。プラス30億の人たちは祖国で生活インフラを確保出来ず流失する。流入先は先進国であり、日本も避けて通れないという理論的仮説です。

いま丹下さんに続いてメガロポリスの意味を改めて聞きたい。それが二回目のセクションの主題です。エクスプロードイングの中国、シュリンキングのヨーロッパ。大野さんはシュリンキングの道を選ぶと言ったが、私は一種の都市が成熟してソフトランディングをするシナリオにはあまりリアリティを感じない。ということでエクスプロードイングの方を仮説化してプロジェクトにしました。日本は人口が減って高齢化するので生産力を必要とします。生産力をこのまま下げていくと今の生活レベルを維持できるどころか今よりもひどい状態にかならないだろう。その一つの仮説的な解決案として、移民を受け入れることを考えざるを得ない。

そこにおいて我々のベーシックな哲学というのは可能なのか。これは一番正しいということを考えず、いろいろな可能性を追求する議論が必要。だからハイパーデン・シティはあくまでもオルタナティブで、特に我々の案はペイエリアのみに集中させていますので、インナーシティを生かしていくこともアリですし、地方都市でもアリだと考えていて、それを否定するつもりはありません。これはwould be goodやcould be goodというシミュレーションの世界で言われていますが、メガコンバクトシティという、水平に広がるのではなく、上に広がっていくものを考えています。水平に広がるとインフラやその他の効率が下がるからです。そしてハイパーデン・シティのsの字をcに変えています。いろんなタイプの案がありますが計画を細かく説明するといつまでも

終わらないので、省略してイメージだけ見て頂きます。

ハイパーデン・シティが乗る400mのスラブの集積と、メガボイドがある海上都市。実は水平に用途と地域が並べられている従来の都市計画を垂直に積むことを試しています。それを更に生活圏で立体的に分割しています。芝浦から幕張ぐらいまでは住宅地区で、これは壁状のものに住居がプラグインしていきます。これをくると丸めると菊竹さんの塔状シティだと思っています。さらに幕張辺りにはエリートたちの土地と、ギャンブルを含めてのエンターテインメント都市を作っています。一番南の茶色の領域、実は100mくらいの高さがあって、コンテナがくっついて移動できる移民のための仮設住宅都市です。こんなことを複数のバージョンでやっています。

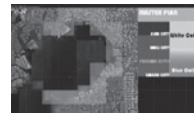
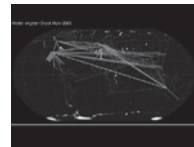
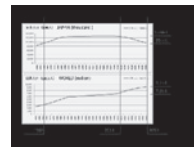
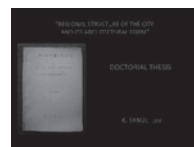
ちなみに我々の案は大体1000万都市を既存の東京にプラスします。1000万は今の日本の人口のほぼ7-8%。それを移民人口のみではなく、下町が一体化した日本人クォーターという想定で加えています。最後のコンテナシティが基本的に移民というのは世界地理上の南北の社会格差をそのまま都市に投影しています。格差はけしからんという議論があるのは承知していますが、今後の100億時代に向けて格差の問題を排除して議論することは出来なくなるだろうと思います。

基本は二次産業が日本からどんどん外へ出ていくという話ですが、南北問題を地理空間的に分離して解決しているからであって、それだと企業自体が流出してしまいますから税収も落ちてしまう。それを取り戻すためにも、このようなものがテンポラリーには必要なのではないかと思っています。

逆未来学の予告編もお話します。人口像には増加像を表すもう一つの絵がありまして、日本は確か1925年くらいから減っています。世界は1975年頃から減り始めている。ただし0になっていません。列島改造が1972年にありますが、同じ年に成長の限界というローマクラブのレポートがでます。それから1973年にオイルショック。その少し前にノストラダムスの大予言が大流行しました。この時点でラジカルな減少のパラダイムの理論があるんですね。それから今私が読んでいる「終末から」というとんでもない大物の文化人、知識人が集まってつくった俗雑話があります。それには我々は21世紀の終わりまで到達せず、四季は無くなるだろうと書いてあります。面白いと思うのは、71年の21世紀の日本と72年の成長の限界が、両方ともシステムダイナミクスという予想のシミュレーション・テクニックを使いながら、生産の限界について極めて対照的な話をしていることです。

成長の限界というのはあまりにも有名なので皆さん御存じだと思いますが、「生産が高くなったとしても豊かになるとは限らない」という話の原点になっています。世界人口と人間の豊かさのシナリオというのは可能体のシミュレーションであるとも言える。

私たちの東京計画もシュリンキングや断片化していく場合があったりと、百科事典は絶えず更新されていき、それは現実の都市も同じ。最初に自然の話と超高層の話でどっちがアウトオブゲートかと話しましたが、そういう議論をしても仕方なくて、いろんな概念は様々な条件に合わせて回していくことではないかな。それが逆未来学のごく一部です。そんなにすぐ出来るわけではなく、私が大学にいる間の最後の仕事に出来ればいいなと思っています。





SESSION\_01

石川栄耀・丹下健三・下河辺淳と国土計画

豊川斎赫×中島直人

Saikaku Toyokawa x Naoto Nakajima

南後 | 前半のセッション1は歴史編で、教科書に書かれたような標本的な歴史ではなく、現在進行形を生きている人たちがどういう歴史を生きているか、という力学が加わっていたと思います。

石川栄耀の生活圏というキーワードの中で、商店街や広場というビックがありました。2000年代以降は商店街がショッピングモールの台頭によって駆逐されていて、僕たちにとっての商店街や広場というものはショッピングモールやネットにあるかもしれない。石川栄耀は、商店街の駆逐とか郊外のスプロールの問題を、点ではなく生活圏という一つのネットワークの中で業態的に考えていたと思うんです。だから、僕たちの現代都市が抱える問題を、都市圏や国土といった大きな全体の都市のダイナミズムの中で捉え直していく中で、石川栄耀に学ぶべき点が多いのではないかと思います。他にも、駅前の魅力とか豊かさっていうのは、大野さんが提唱されているファイバークシティにおける駅前の問題に繋がっていると思います。また、社会化の分布の地図を見たときに、富山コンパクトシティ構想と似ていると思っていて、線状のまわりに生活圏がポンポンボンとある分散型のネットワークの在り方は、現代から見ても遜色ないと思います。

また、丹下健三というオーソドックスな作品を作る建築家のイメージがあるわけですけど、

セッションの中で、コミュニケーションツールの共通言語のプラットフォームを整備するという活動もしていました。言い換えればコミュニケーションの場を設計するという意味で、ROUNDAABOUT JOURNAL のも共通すると思うんですけど、情報を統合したり、ビジュアルセッションしていくというのは、現代の情報社会における都市計画に対して重要な意味を持っていると思います。例えば、丹下健三とか下河辺淳とか固有名詞が出ますが、都市を作るといのは、そういう固有名詞だけではなくて複数の匿名的な会社に関わっているからです。そういう中でどういう場の製作なり都市計画があり得るか、あるいは、錯綜する情報の中でどういう情報を抽出、集約して発信し、建築や都市に反映して行くか、ということ考えた時には、やはり60年代前後の丹下研究室に学ぶことは多いのではないかと思います。今日はコメンテーターとして西沢大良さんと吉村靖孝さんにお越し頂いていますので、一言ずつコメントや質問をお願いしたいと思います。

西沢 | 2つのレクチャーは、非常に対照的でもあるし同時代を絡まり合いながら考察している面白かったんですけど、現実には石川さんが言うようにはならなかったし、丹下さんが言うようにもならなかった。思うようにならなかったという点で、近代都市計画の有効性を捉え直すという現在の問題点に繋がってくると思うんですけど、それと、石川さんと丹下さんが出てくるのであれば高山英華についてのプレゼンがあると良かったな、という気がしました。

吉村 | アーキテクトが石川、下河辺だとすると、官僚ですよ。結局、丹下健三をアーキテクトと呼ぶというよりは下河辺淳の方をアーキテクトと見なすような話だったように聞こえたんですけど、そうすると、アカデミックな意味での都市計画家に求められる役割とは何だろうということ、お二人に改めて聞かせてみたいです。

豊川 | 丹下健三は、都市工学科では、さまざまな研究者、あるいは官僚・政府などを交えて議論できるような場を作る必要性を感じていて、地図を作ってみたりとか、あるいは会議体を作ってみたりとか、一生懸命奔走した。自分が権力を持ちたいということよりは、都市の問題は一人の力では解決できないので、いろいろ

人々との対話が必要であると。コミュニケーションツールを作るとか、そういうことが丹下さんの大いなる貢献というか、そういうことが今では必要とされているし、先程南後さんがお話をされていた、情報がバラバラになっている時代にどうするか、ということの一つのヒントだと思います。その時にアカデミズムの役割もあるのかなという風に思いました。

南後 | それがなぜ、アカデミズムであつたり、あるいは建築家である必要があるのでしょうか。

豊川 | まず、立場的に政治家などに縛られていないことです。自分のプロジェクトとして打ち上げることができる。官僚は当然、公安を通さなければならぬとか、いろいろなしがらみがあります。丹下健三の手腕といいますが、みんなを引っ張っていくパワーといいますが、そういうものには期待してたんじゃないかということが一つ。なぜ建築家でなくては駄目なのか。というのはちょっとよくわかりません。木内信蔵でもよかったんじゃないのかとか。僕としてはこういう膨大な知識を総括してビジョンを出す仕事は誰がやるべきかと言うと、坂倉順三が満州のプロジェクで言っていた言葉を借りれば、青年都市計画家の仕事である、ということ僕は何も疑問を持たずに生きてまいりましたという話です。

中島 | 今の話だけでつなげると、建築家出身の政治家の長岡市長である森民夫さんに同じ質問をしたときに、建築というものはいろいろな価値を統合する訓練をやっていて、それはかなり政治と似ていると仰っていました。確かに様々な価値を、いろいろ矛盾を抱えながらも、ある意思決定まで繋げるというのは建築家の得意な分野なので、そういう政治との接点は強いなと私は思いました。また、先ほど、なぜ官僚だけだったのかという話ですが、それは日本の社会の形であると思います。プラットフォームを実際に作ったのが官僚だったであって、現代では当然パブリックなものとかは、別に国だけではないわけですし、当然、今の時代のアーキテクト2.0というのはぜんぜん官僚ではない。そこは時代背景を聞いてほしかったところでありました。もう一つ、なぜ石川栄耀が実現しなかったかという話ですが、どちらかというと石川栄耀は早すぎる。当時日本は基本的には生産力

を上げれば豊かになる時代だった。そのような時代に、生活の方が重要だよという話はなかなか受け入れ難かったと思います。逆に、今丹下さんが古いというのは、生産の論点を洗っても、ある所で生活の質は上がらなくなってしまう。たまたま石川栄耀はその部分をやっていたので、今召喚されている。なぜ石川がやっていたかという、イギリスやヨーロッパを見ていた。だから、当時は日本の現実には合わなかったけれども、今は合っているという、歴史的な位置づけがあるのかなと思いました。

豊川 | おおざっぱにまとめますと、石川栄耀のテーマが分散であるとなると、それに対応して丹下さんは集中であり、さらにその下で石川さんが消費と生活であれば、丹下さんは生産。現在は人口減少や町の縮小という中で、例えば東京を考えると、集中なのかどうか、駅前が集中でその周辺が分散なのか、さまざまな集中、分散を巡る議論というのは現在でも続いています。2011以降のビジョンとして、セッション2では大野秀敏と八木はじめにプレゼンテーションをお願いしたいと思っています。

藤村 | 中島さんと豊川さんに、それぞれ1920年代あるいは60年代当時に代表する、今から見てアーキテクトという役割を担っていた存在であるところの石川栄耀であつたり丹下健三、下河辺淳に関わるプレゼンテーションをして頂きました。先程中島さんが仰っていたように、メトロポリタニストと小都市論というのが対比されやすいのですが、両方必要だと言っていたという事がポイントで、おおざっぱに言う、大きな対比はあるのですが、その関係性を巡って大都市と小都市はどう関係するべきか、生産と消費はどう関係するべきか、はたして集中論と分散論というのは、どのように国土に適応するべきか、の様な事が既に問題になってきたということで、それが2011年バージョンでどのように見解可能なのかというあたりが、次のセッションで討議できればと思っています。ここで、いったん終了させて頂きたいと思います。それでは、中島さん、豊川さんありがとうございました。

セッション01\_twitter

matsushimaJP\_おはようございます。本日のLRAJ2011、ハッシュタグは #LRAJ2011です。そのまんまです。■y\_nango\_ LRAJ2011に向かう。藤村さん、TEAM ROUNDAABOUT、運営スタッフの皆さん、よろしく願います。■orihihs0y\_ 気を引き締めるRT @ryuji\_fujimura: 文字おこし担当の皆さん、皆さんが起きているのは単なる文字ではない。歴史です。文字を起して、歴史を起す。そのつもりで臨んで下さい。■orihihs0y\_ オカレもか。RT @shirasu\_: @okalemon12 オカレ発見。やや前方。■shirasu\_ すでにフリーペーパー！1時まで飽きさせないヴォリューム。慌ただしく吉村さん佐藤さん。佐藤さんすでにインタビュー ■matsushimaJP\_ RT @fujijdata Ustreamの「LRAJ2011」にチェックイン！ustre.am/Fo8y ■hsaayraashi\_ 会場の女子率の低さが異常

です……アウェー ■ikasamaya\_ おつ。RT @fujijdata: 本日、機器トラブルにつきustream配信できそうにありません。申し訳ありません…。■matsushimaJP\_ なんとすみません。RT @fujijdata 本日、機器トラブルにつきustream配信できそうにありません。申し訳ありません…。■satoutosihiro\_ LRAJ2011開始寸前の会場の様子その02(動画)でつたえします youtube.com/watch?v=ybLcXU… ■ryuji\_fujimura\_ LRAJ2011スタート!! まずは中島直人さんレクチャーから。石川栄耀=アーキテクトという解釈で歴史を参照する。■siskw\_ 次は国会図書館の本のタイトルに含まれる次の単語の年別比較グラフ「国土計画」「地方計画」「都市計画」。都市計画が近年増えてきているが、ここでは地方計画という言葉に着目する。■siskw\_ 豊川さん。国立小山高専准教授。画面に映っているのは、丹下研究室が

復興計画から国土計画へどのように都市と関わろうとしたかの展示パネルから。(文章を読んでもらうためにtwitterのフォーマットと合わせました) ■tachesan\_ 下河辺淳。東大卒で事務次官まで登りつめた官僚。列島改造論にも関与。工業、生産力をいかにして測定するかというのが彼のテーマ。東京を1キロメッシュででき、工場の密度分布をリサーチ。日本を38万画素で見るようなもの。密度が丹下健三とは違う。■ryuji\_fujimura\_ 豊川: 丹下健三は建築のかたちを作っていたわけではなく、専門家が協働できるようなコミュニケーションを産むためのプラットフォームとして統計を可視化した地図の作成に力を入れていた。■tachesan\_ 豊川: 丹下に影響を受けた。福島計画2060について提案。東京計画では居住したい海上に都市をつくらうとした。福島の居住したい陸地では、道路を寸断し生活圏を断念することも方向性としてありえるのではない。避難区域はサファリパーク的に生態環境保管エリアに。■siskw\_ 最後に豊川さんの提案。ゼロぼびゅーしゅんして。0人口の土地を作ってもよい。生活できるところをあえて減らしていく。私権の制限。まちづくりばかりがフーチャーされていく中で、都市計画としては私権の制限が必要なのではないか。■ryuji\_fujimura\_ 豊川: 都市計画=主権の制限だということを宣言していく必要があるのでは。■scotch\_zk\_ 第一セッションで今日の論点が見えたか。ツイッター建築家の藤村さんか。笑 JRAJ面白ッ！■has20090827\_ 高山英華です。RT @siskw: 西澤大良さん。共通点などが分りたいへん面白かった。共通点などが分りたいへん面白かった。けど実際に石川栄耀と丹下さんの考えてたようにならなかった。あと、この二人を取り上げるなら〇〇〇〇も取り上げて欲しい。■oia193\_ 東京計画1960は生産性を求めた。福島計画2060はまず生活圏を持つてくるかどうかの大きな二極がある。まだ答えは出ていない。





## SESSION\_02\_twitter

tachesan\_ セッション2始まる。大野秀敏さんの「シュリンキングニッポンのための都市戦略」から。大野さんのプレゼンは別のシンポジウムでも面白かったから楽しみ。■ YMMT\_Yoshihisa\_ セッション2:TLのみの方はAARで補間>大野秀敏「縮小社会が描く都市モデル」aar.art-it.asia/u/admin\_edit1/... // 八束はじめ「メタボリストたちがみる建築家の夢と現実」aar.art-it.asia/u/admin\_edit1/... ■ MichelBoulez\_ 縮小は東京にも当てはまるのか? ■ YMMT\_Yoshihisa\_ 関連MEMO:フードデザート問題研究グループwww18.atwiki.jp/food-deserts/m/ ■ siskw\_ ファイバースティータのファイバーは、都市への介入しやすさがこれまでの都市計画と違う。■ hanamotoko\_ 大野さんの日替わり公共施設デリバリーシステム。コンバクンティに住まいたいことを選んだ人のため?何人くらい?どれくらいの

範囲で?予定通りに病気になるたりしないしなあ。■ oia93\_ 人件費を削りすぎると所得が減るのは?と思ったり■ hanamotoko\_ アジアで起きていることなんて欧州の誰が理解していたらどうか? ■ hanamotoko\_ 産業のないため国でずつとこのまま、ためなんだろう。なんで? ■ siskw\_ 第二の開国。第移民時代。■ MichelBoulez\_ 移民も老化するという... ■ ryuji\_fujimura\_ それね。RT@hanamotoko\_ えーこんないい立地、まず国内の人が居たがるでしょう? ■ hanamotoko\_ まーいいのか、働き者の移民は海辺、国内のジジババ(←おれら)は山ん中にもいれば。■ hanamotoko\_ 世界中を渡り歩く移民家族が生まれたら、その労働者階級へ向けたコンテナシティをつくらざるを得ないのかもね ■ siskw\_ 大野さんも八束さんも、基本的な生活像は今とあんまり変わらないのかな...家があって会社行って遅く

まで働いて帰ってくる、みたいなライフスタイルのイメージ。■ tachesan\_ 戦前から高度成長時代の都市計画の話になると官僚の名前が色々出てくるのがすごいなあ。いまの時代にそこまで影響力持った官僚なんているのかな...。■ siskw\_ 1971年の本、21世紀の日本と1972年の成長の限界という二つの本がともにsystem dynamics という同じシミュレーションを使っているから真逆の結論を出している面白い。■ siskw\_ 逆「未来学」なんですな@ryuji\_fujimura:過去の未来学を今から逆に振り返るとのことRT @siskw 「逆未来」という言葉は何を指すのだろう。■ hanamotoko\_ 何を犠牲にするか、という自覚なり方針を共有して、みんなで何かを計画的に犠牲にした時代なんてなかったよね。後からあれが犠牲になった、これが犠牲になったと言っているのであって、自覚的犠牲ありきの都市計画なんて、できるんだ

ろうか? ■ hanamotoko\_ もうスラムができること前提に、よいスラムを考えるって選択肢ないの? ■ siskw\_ 人口〇〇制?性?わかんないけど僕は制だと思っていて、それは労働タイプで規定されるから、制度なんだよね。労働制度、労働制度の違いによる、衣食住の手に入れ方の違い。■ siskw\_ 労働の発展は、農業→工業→サービス→クリエイティブとでも分けられればいいのか。そうすると4つのタイプがある。ひとつ目は土地に固定。二つ目は職場に大規模数固定。三つ目は職場に小規模数固定。四つ目は個人。人口流動制の最終形。wifiとかクラウドとかあるから成立。■ siskw\_ そうです。サーセンw @ryuji\_fujimura: サッセンの枠組ではRT@siskw\_ たいらさん:人口定着制と人口流動制A・B型の話はほんと賛成。今語るべきは労働タイプだと思う。■ hanamotoko\_ 大野さん八束さんお二方の案の一番の違

いは、分散が集中か、とかいうことではなく、資本主義上にあるかどうかだと思う。と考えると移民で生産力の維持向上とする八束さん案は、なんか天気に見える ■ siskw\_ スラムには電子マネーBI+(wifi,fablab)+暴力の排除でいいんじゃないんですかね。■ hanamotoko\_ 大野さん、日本の女性社会進出率が異常に低いことを話してくれてありがとう。(裏を返せばもっと社会進出=自立=人口減少可能性の余幅があるということなんだけど、結婚出産し、かつ働くことを考える社会がない限り、女性の社会進出はネガティブファクターであり続けるだろう) ■ hsaayraashi\_ 心の準備って話があったけれど、たぶん地方の人は地価下落とか過疎化とか身近に考える材料があって考えずにはられない人が多いかもしれない、東京にいる人のほうがよっぽど心の準備できてないのかもって思う。

## SESSION\_02

## 縮小社会は都市モデルになりうるか

大野秀敏 × 八束はじめ

Hidetoshi Ohno x Hajime Yatsuka

南後 | まず、大野さんのお話に関してですが、90年代には、隙間とか点とかという介入の仕方があったと思うのですが、大野さんのお話では、隙間とかの介入の仕方をさらに乗り越えて線というキーワードで繋いでいくというのがあると思うのです。それがさらに全体性を獲得している。全体性を獲得しているのだけれど、近代的な都市計画と違って、かっちり作りすぎないというか、半開きの領域ということも仰っていましたが、スクリプトの窓に、さらに塗っていくように付け足すことが出来る、あるいはひいて減建していくことが出来る、時間という要素が入っているのが、面白いと思いました。もう一つは交通機関に関係する話で、交通自体が建築的課題だというメッセージとして受け取ることができました。時間と言うキーワードで言うと、八束先生のお話に関しても、百科全書、ノイラートからきていると思うのですが、他者が介入することで、塗り替えがどんどん行われていく時間というキーワードがあるのではないかと思います。

丹下研究室のリサーチは高度成長時代において、仮説とか日本の未来像というのが、ある程度共有できたものとしてあったとおもうんですね。70年代以降というのは未来予測、というのが破綻し行き詰り、未来を描くとかビジョンを

描くということが困難になってきていると思うのです。そういった時代の中での予測やビジョンを、社会や一般の人と共有していく上で、どうい困難があって、また60年代の丹下研究室のリサーチと何が共通していて何が違うのか、ということをお聞きしたいです。例えば、移民を受け入れるといった様なビジョンを提案していく上で、それに多くの人を巻き込んで共感可能性みたいなものを提示する上ではどのようなハードルがあるのか。それをまずお答えください。

八束 | 1960年代も同じだったと思いますが、先程西沢さんが石川栄耀も丹下健三も、構想した通りにならなかったと仰いましたが、当然、僕は将来こうなるだろうとは最初から一つ思っていない。むしろ我々がやっているのは、あるイメージを提示するという、ある種の挑発です。問題提起のためのプロジェクトなんです。我々が非常に極端なことをやっているのは、極端の方が問題を整理しやすい。だから本当言うと、それが望ましいと思っている訳ではさらさらないのです。私は自分の計画について、ユートピアだと思っています。それでもこういことを考えないと、さらに酷いことになると思います。例えば原発の問題で生活の室をキープできないからほかの道を歩こう、という方向性もあるわけですよね?それも一つの考え方ですが、何かを犠牲にしない限り、我々は都市なり生活なりを維持できないことに変わらぬ。では何を犠牲にしたらどういった姿になるかという、そこから先は大野さんと僕は違いますが、そこから前は変わらない気がします。ただ、ネガティブな予想も面白いことに外れてるんですよ。特に73~74年は公害問題のピークで、このまま行けば、日本の大気と海が汚染されてみんな死んでしまうと言われていた。プラス予想もマイナス予想も両方外れているんですね。だけど絶えず未来のことを想定して考えないと何の計画もできないと思っているし、それに関しては大野さんも同

じなんじゃないかなと感じています。

大野 | 皆がイエスっていうイメージの共感はある得なくて、賛否両論を含めてその可能性はあると思います。不確かな物をビジュアライズし、抽象度を高めてエスカレートし、拡張することによって問題を喚起し、より多くの人が巻き込まれてしまうことを目的にしています。

西沢 | 人口が減って行くとしたらこうなる。増えて移民を受け入れるとしたらこうなる。これを絶え間なく続けて欲しいですね。これは心の準備にもなりますからね。できるなら一部でもいいから、先ほどの長岡のどこか、あきらかに人口が縮小している地方都市で、一街区でもいいから社会実験をやしてほしい。

二つ目は、エクスプロージョン型で都市をやるのかシュリンキング型で都市をやるのかですが、聴衆のみなさんが混乱しているのとよくないので、私なりに補足します。人口増か人口減という見方は本当は良くなくて、僕は「人口流動性A型」と「人口流動性B型」という区別をしています。「人口流動性A型」というのは、前近代の「人口定着性」が流動化していく段階のことです。昔の集落のように食糧生産地とエネルギー生産地に定住している状態だったのが、土地から引き離されて賃労働者になって都市住民になっていく、この近代化のキックオフのときにおこる農村から都市への人口移動のことです。都市や都市の近郊に移住させて、お金で食糧とエネルギーを手に入れるような生存形態にする。これが「人口流動性A型」。

「人口流動性B型」というのは、まだ完全にその全貌は表れていないのですが、都市人口が国民の7、8割くらいになると始まる人口移動のことです。たとえば 持ち家に住んでいたのがまた流動しはじめて、別の街へ移住せざるをえなくなるとかですね。あるいは都市間競争と雇用流出もあるから、隣の団地が南米の移民ばかりになるとかね。あるいは少子高齢化。これは前近

代の集落であれば別に街区の変化には至らないんですけど、いったん賃労働者になって核家族になって都市に住んじやうと、少子高齢化が突然、街の問題だと例えばゴーストタウン化に発展する。これらの人口変動は、A型のように農村から都市へではなくて、都市Aから都市Bへという人口移動ですね。だから「人口流動性A型」「人口流動性B型」という区別を私はしているんですよ。そのB型が日本の問題で、A型はいまや途上国の問題です。途上国ではばばん都市に流れ込んでスラムはがんがん出来ている。A型がはじまっても行政の近代都市計画がうまくいっつかないから、いろんなタイプのスラムができてしまう。でも、日本をふくむ旧先進国の今の人口現象は、どれもB型です。都市によっては人口減になったり人口増になったりしますけど、かならず国内外を含む都市Aから都市Bへの人口移動によって起きています。

だから、私はシュレンキングとインプロージョンは対立していると思ってなくて、いずれにせよ「人口流動性B型」だと思っています。これは人類史上、都市人口が世界人口の半分をこえた段階でどうしても出てきてしまう問題です。これに対するなんらかの都市計画だったりどういふふうにもその人々を最低限の人権を保たれる状態で住ませられるのか。これが最大の問題だと思います。というのも、国家と資本はむこう30、40年で一度は崩壊することになると思うので、そうなったときに街ながりが都市がどうなるのかという準備ですね。これが決定的に欠けていて、今、資本主義が壊滅すればみんな発狂すると思いますし、国が破産しても発狂しちゃうと思うんですよ。みんな賃金をもらわないと食料もエネルギーも得られなくなっている。そうなったときにもちゃんとした街をつくっておけば生きていけるんだ。これが今、都市を通じてやらなければならないことですね。



SESSION 03

# そして都市は残される

**大野秀敏**

Hidetoshi Ohno

**八束はじめ**

Hajime Yatsuka

**豊川斎赫**

Saikaku Toyokawa

**中島直人**

Naoto Nakajima

**吉村靖孝**

Yasutaka Yoshimura

**西沢大良**

Taira Nishizawa

**南後由和**

Yoshikazu Nango

**藤村龍至**

Ryuji Fujimura

**藤村** | それではセッション3の総括討議に入りたいと思います。総括討議では「戦略編」と題しまして、これまでの議論を一体どのように社会的議論に育てていけるかというような戦略を話していければと思います。それでは先に、コメンテーターとして御登壇いただくのは、西沢大良さんと吉村靖孝さんです。

さて、第3部の討議ですが、これまでの議論を踏まえ、縮小社会に対するヴィジョン、あるいは近代化の終わりの都市が迎える将来像を、どのように社会的な 이슈に高めていくかという、具体的な戦略をお話したいと

思います。ひとつ思いつくのは、今回の討議で列島改造論の話が何度かありましたが、「丹下さんの計画も石川さんの計画も実現できなかったのではない」というお話がありました。かつての丹下さんの東海道メガロポリスもある意味では可能態であった。その丹下さんの議論がされなかったが、ある政治的なストーリーと合致した場合には、そのヴィジョンが実際に社会の中で実装されていく過程がある。田中角栄がアーキテクトとして評価されるのは、それを社会的な 이슈として高めたことにあったのではないかなと思うんです。つまり、「俺はじっちゃんやばっちゃんが笑って暮らせる世の中を作るんだ」というような言い方をしたわけです。また、「三國峠をダイナマイトでぶっ飛ばせば東京と新潟に雪は降らなくなるんだ」と豪語し、その土を使って新潟と佐渡の間を埋め立てようとしていた。そのような、いわゆる日本の表・裏という構造を演出して、格差を解消するというストーリーに乗せることによって、今日の新幹線網を実現するというような、ある種の文学的なイメージを自身の計画に重ねたんです。それがヴィジョンとしてひとつ秀でたところだったと思うわけです。それがビジョンとして一つ秀でたところであったんだと思います。メタポリストや建築家達の提案というのは実現しなかったと一般には言われがちですが、少し詳細に見ていけば、例えば横浜市などでは浅田孝さんが1960年代に書かれた七つのプロジェクトというレポートが、その後横浜市の六大事業という形で転換された。ベイブリッジやみなとみらい、金沢の埋め立て事業、あるいは港北ニュータウンのように、今の横浜の都市の骨格を作るプロジェクトに応用された。そこに横文彦さんや大高正人さんがそれに関わるといったような経緯があったかと思っています。そのような形で建築家のビジョンは必ずしも100% その通りに実現されることはありませんでしたが、ある政治的なプロセスに、ある関わりを持つとそれが部分的にでも実現される事がある。ということはその可能態というのは議論を起こすためだけかという、もしかしたら聴衆のみなさんはものすごく力のないイメージを持たれる方もいらっしゃるかもしれませんが、そうではなくて、実際の社会の中の、あるいは政治的な状況に少なからぬ影響を与える可能性がある。そういう意味でビジョンを世の中に提出するときにはそのような社会的な共感を、あるいは議論を調達するその後のプロセスまでも考えるんじゃないか。そう

いった事を考えるのが趣旨

です。そのような前提をもとに議論を開始していきたいと思いますので宜しくお願い致します。**南後** | まず今回のプレゼンテーター、コメンテーターの方がどこまで同意してくれるか分からないですけど僕なりの問題の仮説として、一つキーワードとして集中と分散があって、それは当然1960年代の頃であれば、産業とか人口の中位的な配置の問題があったかと思っています。今日のタイトルでもある列島改造論2.0の2.0というところにも関わるんですけど、僕的にはそれが地理的な問題であると同時に空間=政治的メタファーは絡んでいると考えているんですね。ということかということ意思決定の問題だということかというわけですね。結局60年代丹下さんの頃、田中角栄の頃というのは集中であろうが分散であろうが結局は政治の意思決定はどちらも集中だったと思うんですね。集中というのは基本的にトップダウンということで、しかも当時というのは、丹下さんのリサーチであれそれは産学協同であったり他分野という人がいっぱいいましたけど、基本的には官僚の人とか、ある特権的な人しかその情報を入手できなかったわけですね。それが今の21世紀という95年以降はある程度部分かつかえば統計情報というのは誰でも開かれたものとして手に入れられるようになった変化があると思う。そう考えると都市のビジョンを開く上で、都市計画という言葉自体妥当性を問わなければならないけど、その都市をデザインしていく上で、その意思決定の主体のあり方をどう捉えているのかということは何人かの方に伺いたいと思っています。例えば八束さんのプレゼンテーションにあった百科全章というノイラートのメタファー、それはある意味ウィキペディアのようにある人が基本的には書き換え可能であるということですね。ひょっとすると八束さんから八束研究室の人じゃないと書き換えられないのではないかと。百科全書という言葉を使っているくらいなら2.0的な他者がそこに介入する余地はどう残されているのかというと、大野先生にはハイパーシティというのはある意味未完結で開かれています。それが全体像が描かれていない。するとその線と線の関係性というのかその部分とその全体の関係性というのはどう考えられているのか、あるいはその線分の先をマネジメントしていく主体はどう考えられておられるのかということをお聞きしたい。その二点に関して八束さんと大野さんのほうからコメントをいただきたい。意思決定のありかたということですね。

**八束** | 非常に難しい南後さんが考えるよりも難しい話なんですけど、僕らの計画が我々の研究室以外では書き換えられないわけではないかというのはその通り。それはなぜかということ書き込まれすぎているから。あれをかなり書き込まないデータに基づくことは割とあることで、単純なタイポロジーを並べているだけなのでそれはできるし、その一部分だけを取ってそれを作ることでもある。建築つばい話だが社会ログラムをそこから抽出することも可能だろう。ノイラートの内面を使っていることには間違いないのだけど、どうしてもデザイナー的な視点からトップダウンになってしまう。た

だしこの問題に関しては、都市工学科の学生の頃から、アーバンデザインとはあまり言っちゃ行けないんだが考え続けてきて、西沢さんにお願いしていた10+1創刊号、その後の二号が三号でノーテーションの特集をやった時も、結局、建築のドローイングではない書き方があるはずだとずっとやっていた。今回、メタポリズム・ネクサスを書く上で、スコピエのプランニングを還元していることに、同じことに突き当たった。なんだがそれを一番番感しているはずの磯崎さん、要するにシンボリックプランニング見えないようにした部分で、これは磯崎さんのアイデアに違いないと日直彦さんを通して確認したら、そうじゃないよと言われてしまっ、そこで止まっているんです。磯崎さんは全否定なんだが、僕的には現実のスコピエのイメージで、現地の人にはかなりアンビバレントな感想を持っていて、丹下さんは現地に行った結果、僕らが考えていることできてるじゃんと言っていた。それは形としては磯崎さんが否定もするし、形の上のことではなく、モジュールであったり、アイデアだったり受け継がれているという評価をされた。コンペである以上、かなり求められていたのは形だろうが最初から実現されるとも思っていないで、その骨格がじつげんされていいというのが丹下健三であり、その話を思考とするに至らないまま、今まで経過してしまっ。答えになっていないが、そういう問題を抱えているのだと感じます。

**大野** | 縮小期と拡大期のコンセンサス取り方の難しさの差が圧倒的に違う。拡大期のときは誰でもある程度はうまくできる。つまり明日からは金持ちになるから分け前があるよと、そういう理屈が使えるので少々下手なマネージャーでも統括できるんだけど、縮小期が減っていくので今日にはやらないと明日には分け前が減るシステムなんで非常に難しくなるからこそ全体像が必要なのだがそのとき示せるのは発想の形だろう。発想の形といえは丹下さんの1960年契約のように埋め立て地は東京湾にあるのを見れるし、海はたるとつながったり、ある意味じゃあの頃に似てんじゃないかなと思うんですよ。だから、発想の形が大事で、震災がらみのこともあって、船舶の関係の学科の先生が三陸に大型船を作り複合性を加えるのがいいと言っていたが、全く違ってたモダニストの考えで、三陸の問題はそんなことではなく漁業が壊滅的狀態になっていることで、モダニスト的に考えると解決策になっちゃってことね。どんな解決策があるだろうかと、ですから我々が先ほどお見せした公共施設でもですね、今まで移動サービスっていうのは昔はブックモービルっていうのがありましたが、ブックモービルっていうのは発明でもなんでもないんだけど。今までのイメージはそれまで外界的であるとか、遅れててその内きちんとした図書館ができるだろうっていう、暫定でしかなかったんですね。それを暫定でなくてその他でもいいんだと、その方が一人当たりのコスト負担も少ないきちんとしたサービスがより細かく受けられるんじゃないかという発想の型を提供していきたいと思っています。ですからそれが意思決定をするにあたって、我々は選択問題を提示されるわけですよ。例えばここ





SESSION 03 twitter

taisou\_30\_sai\_ やっぱ角榮の時代は大きな物語として政治が機能してたのかな。大きな物語が消失した今国土計画は可能態(=小さな物語)としてしか現れてこないのかも。■ hanamotoko\_ 松田くん、やっぱ熱海のモビリティ構想ってクールだったんだ今イベントで話聴いて、そういう流れになって、改めてさすがだなって思ったよ ■ miyangroove\_ 解体から始まる日本連合国というのはどうだろうか。■ YMMT\_Yoshihisa\_ 前回以前からの2.0的な状況に関するテーマを(パネラー構成上)南後さんが引き受ける立場に。この話題が発展するのは、目下不明。■ tachesan\_pingpong\_ とかCITY2.0的な、集合知を使ったまちづくりや都市計画が成立するかどうかというのは自分も気になる…。 ■ siskw\_ この場合の「共感」というのは、いわゆる専門家の話がオープンにされ、理解されるってことじゃ

ないのかな。■ Hanamotoko\_ だってほんとなんだもんー RT @ryuji\_fujimura: またそういう線引きをする RT @hanamotoko 知の共有がほんとに必要だと思うなら、インテリはもうちょっとバカに興味持てればいいんでない。■ siskw\_ 過去の津波の形跡が汲み取れなかったというのは、情報の漏れがあったってことで、広い意味で「オープンじゃなかった」ということかな。■ 1000summer\_ 不安ベースが共感ベースかって、とても大切なことだと思うけど、計画を実行する主体である行政って、慎重にやらざるをえない立場だから、どうしても不安ベースなままじゃないかなと思ったり。■ siskw\_ 「いつ選択肢が決定されるのか」というのは、あるタイミングで切断して決めるしかないよね。逆にその切断はいつでも繰り返せる状態においておくのか。二動軸のランキングみたいに、デリー、

ウィークリー、マンスリーが常に併記されればなしの状態。■ sho1220\_ メディアリテラシーという話ならプロフェッショナルだけじゃなくて普通人にも求められてる能力だと思うけど ■ siskw\_ デシカメなんて、フォーカスですら後から合わせるアイデアとかあるしね。選択の簡易な決定と簡易なひっくり返しが可能な状態。■ fujiidata\_ ほっといても膨大なログが残るのが現代だとして、その地図をどのように作るかが重要ということか。■ siskw\_ 「いつでも決定できる状態」は今の政治を前提とすると合わないんだけど、それは政治を変える必要があるんだよね。今の政治形態は、人口流動制Bにフィットした政治形態で、人口流動制Cには適さない、みたいな。■ siskw\_ 「誰が何にでもなれる」ことが可能なポストモダンな世界なら、ユーザーオリエンティッド(顧客志向)なんてなくなるよね。なんでもなれるし。逆に自分が何かにな

れる環境を探すために環境志向になる。■ hanamotoko\_ 資本主義崩壊がいかに恐ろしいか、という感覚が、世代間で全然違う。これってさっき中島さんの話にでた戦争の終わりと似てるかも。当時のおじさんたちはヤングよりも、戦争が終わるの怖かったでしょ。■ fujiidata\_ 西沢さんの言う「環境オリエンテッド」の環境。使い、作る続ける事はログを残しながら地図をつくること事でもある。■ OKADATOMOHIRO\_ これ、国の事業なのですね。RT @YMMT\_Yoshihisa: インフォグラフィックによる「共有」、大野さんも取り組んでいます>縮小する日本を表現してください(ツタグラ) tsutagra.jp/jp/themes/theme-01 ■ oia193\_ 国家と資本が壊れても使える施設を作ったほうが良い! 大野さんも言ってたけど素人は今ある選択しかできないからプロフェッショナルが提案が必要! ■ hanamotoko\_ 情報環境の変化は、良いか悪

いかじゃない、そうなる事実があるだけ。でもこの環境って都市計画みたいに、どうコントロールするかを語ったりされないん? ■ siskw\_ 個人的には、西沢さんがいう人口固定制、人口流動制A,B,(C?)と農家、ブルーカラー、ホワイトカラー、クリエイティブクラスと、ビレッジ、シティ、メトロポリス、ハイパービレッジが対応してるんじゃないんですかね。■ fujiidata\_ 対立軸がはっきりしていた事と同時に、そのどちらかの立場にならなければいけないわけではない、といういわば矛盾した初期設定が功を奏しているのではないのでしょうか。■ fujiwalabo\_ うん。ほんとに。RT@hanamotoko: 未来について、こんな憂鬱な話を今から聞かされて、すごいよな今どきのヤングは。私なんか小学生の頃、CO2温暖化のニュースを聞いただけで自殺したくなく子どもだったよ。甘いね。わんぱくでもいい、遅く育って欲しい。

に病院を作りますが病院がなくなってもいいですか?っていう常に二択問題として出されるときに、なんでそこに移動サービスはないのかって。それは一つの例なんです、つまりプロフェッショナルの役割ってというのはオルタナティブを出せるかどうかなんです。素人的人ってね一般的には規制のイメージの中でしか二択問題が出せないですから、三択にしろね。実際に今の被災地でも復興計画だつてとんでもない時代遅れのものが実際に出てるでしょう。ああいうことも、行政の人たちであるとか政治家たちが復興っていうとすぐにビルを建てようって考えちゃう人がたくさんいるんですよ。どのくらいバリエーションが出て、有効な手段が出てくるかっていうところでプロフェッショナルとしての責任のあり方があるんじゃないかなという風に考えています。それが実現しなかったという観点でいえば先ほどの評価のようにいろんな見方ができると思います。八束 | 我々二人はいいかげんしゃべったんで真ん中の二人にお話いただきたいと思いますが、ちょっとだけ日常っていう話を南後さんがしゃべったので、さっき逆未来学の予告編で見て頂いた三つのシステムダイナミックスってというのは意思決定のプロセスなんですよ。アメリカって国はまさにそういう国で、政治家が政策決定するときに、いろんな利害・解決性のある話をどうやって最適地に行って統括できるか、という話なんです。それが今でも社会学とかやっている人たちはそういうアプローチなんだけど、そこで決定的に足りないのはさっきのトップダウンとボトムアップの話でさきどい話なんだけど、本当にやるべき話の遠いゴールみたいなイメージってそれだと持てないんですね。現状での利害ないし価値判断みたいなものはぜんぶ前提として受け取った上でのオペレーション。そこは我々はやっぱりポリティカルコネクトネスみたいな話を、例えば、格差解消みたいな話を避けて通れないと言ったんだけど、そこまで議論はしない限り南後さんが言ったみなさんに受け入れられるかどうか、っていうことが結局形骸化していく危険と裏腹なんじゃない

かな。かなり話をはしょっているのだからにくいかもしれないけども。そういう気です。吉村 | 集中化・分散化ってどちらかというわけではなくて、トップダウンとボトムアップのどちらかっていう話ではなくてハイブリットってことだと思うんですけど。でも僕自身が感じているというか世代の違いかもわかんないですが、2.0とか1995年以後ってというのはボトムアップとかあるいは今までの個人的な印象ですが、建築家の方がやるリサーチだとか、あるいは丹下さんがやっているリサーチだとかで収集しているリサーチしているデータがまじめすぎるっていうか、僕にとっては生真面目すぎるデータばかり出てくるんですね。でもそういうかつこつけの正しいデータだけではなくて、例えばその地域に住んでいる人であるとか、あるいは住民の人たちが持っているような無意識のデータみたいなものを集合的に収集できるツールとか、あるいは藤村さんの言葉を使えばアルゴリズムみたいなものがいっぱいできてくるような気がして。例えばコールハースがやっているAMOとかがやっているデータの取り方ってもう少しふざけているというか、おもしろおかしくユーモアがあるものをとってきて、それがGoogleとかで取り入れてるような無意識みたいなものをうまく取りいれてるような気がするんですよ。南後 | ちょっと話がずれますけど、僕が最近面白かったのは、建築家で藤本壮介さんがいますね。藤本さんのハウスNAという作品があって、あれが建築界でどう評価されているのかというのは置くとして、webでは、要はガラス張りの中身が丸見えなので、建築に対する印象が、すけすけ建築とか、その一日で発狂しそうだとか、年がら年中日焼けできそうだとか、建築の内部の批評だとか、あまり専門家から出てこないような発言が出てくるんですけど、それがすごいリアリティを感じ

るみたいなものがある。僕が言う体臭というが無意識みたいなものをすくいとることができるのかっていうのがさき聞いてた。だからデータの扱い方も1960年代的なものと変わっているんじゃないかというのが僕の問題意識の念頭にあった。中島 | それはさっき言ったようなディジションメイキングのプロセスの大枠っていう話に付着していくので、どういうディジションメイキングを目指すかっていうのは実は最初にあるべきなんです。そういうものをなしに虚心地懷にデータを集めるとしかるべき方向が出てくるというのは多分嘘で、逆算してやっている。その前提をないふりをしてやる計画っていうのはそれがボトムアップのようなふりをしていくとそれはたちが悪いと僕は思っている、それはわれわれが隠そうとは思わないわけで、実際にはボトムアップの手法っていうのはあると思うけど、大枠の話の大枠の議論っていうのは欠かすことが出来ないし今会議されていることなんだと思います。すいません、また喋ってしまっ。南後 | 豊川さんに聞きたいのですけれども、意思決定がすこし違うかもわからないですけども、異分野とのコラボレーションとかとい

う話で、例えば丹下研であれば、地理学の本内伸三さんであるとか、当時の官僚であるとか行政であるって人たちが、それが計画にも部分的には落とせざる結果、実現してきたという、なんか僕らの世代からすると羨ましいというかそれぞれの分野のしかるべき人たちが集まって充実したコラボレーションしていた。それは歴史の書き方の問題なのかもわからないですけども。例えば、さっきの大野先生の・・・大野 | 大野さんでいいですよ。南後 | 大野さんの自動車の問題ですけど交通の問題とか、例えば、郊外で馬や象を一家に一台どころか、家族全員が車を持っている郊外も増えているわけですよ、車の交通とか電車の交通をいかに解決していくかというのは当たり前ですけど、住民だけが考えるべき問題でもないし、建築家だけが考えるべき問題でもない。むしろ最近のminiとコラボレーションした展覧会も、例えばトヨタとか、日産というメーカーが、建築とか都市計画の分野にもっと加担





すべきだというか、彼らが果たすべき社会的責任みたいなものは多い気がします。1960年代の頃の実態として官僚との協同がうまく、というか実際どうなっていたのか、それが今と比べてやりにくさというのがどう変わってきているのかということ。前の都市計画を巡る知のシェアなんじゃないかな

**豊川** | 知のあり方ということがある。実は楽屋裏です。西沢さんとお話するときにキーパーソンが垣間見えたりしないかとか。結局その、例えば、ちょっと話がずれるかもしれないですけども丹下さん自身は都市の動きというものをまずテーマとして、今大野先生が二十一世紀の都市のモビリティの話をしたのと同じように、戦前戦後において都市の動きというものを丹下さんはずっと追跡していた。それは人口の流動であったりとか、インフラであるとか。それに対して高山先生は丹下さんに動きをやれと言われた、自分は容積とゾーニングをやるんだよということであるんですけども。高山さんと丹下先生の研究室から多くの官僚が排出されたということがまず一つ。あと昔の教育制度そのものの面影かもしれないですが、非常に限られた、狭いインテリの世界がある。例えば旧制高校で例えば同級生が弁護士会の会長をしているとか、OBとか、何とか大学の総長をやっていたりとか、企業の名誉会長だとか、そういう縦社会にとって優位の方々、学生時代から非常に教育に知識があり、束ねられていて、それが社会に出て行った時に、それが結集としてチームで機能する。それが、今は全然前提として違う。高山さんにしても学業実力を越えて、コミュニケーションしないといけないことは言っていた。それは丹下さんの引き継ぎで、それは丹下さんがアメリカに行ってさらに意を強くして、それを持って帰ってきて、いろいろな成果を出した。海外に対して目目が開かれていたし、日本を良く知ろうという情熱を共有しているという言葉が彼らからよく出てくるのですが、そういう意味では育ってきた環境も全然違う。活躍できる場が広いというのがあったのかなと。しかもこうべさんがよく言うのは、戦争が終わるときに何が良かったかという、上の世代の人がみんな居なくなったのが良かった。要するに公職追放で、悪いことをした人はみんな追放された、自分達よりも上は居なくなったとおっしゃっていて、逆に言えば、メタポリストの人の上の人も活躍できたし、丹下さんも活用できたし、かといって僕らの上の世代の方に言っているわけではないですよ(笑)。ただ、そういう時代だったと下河辺さんはそうおっしゃっていました。

**大野** | 今のその話、階層があるといいたい話だけど、それってまずくない？

**豊川** | 昔はどうだったかという話で、今がどうあるべきかというとは全く別の話です。

さっきも言ったように、先進諸国は基本的に戦災復興経済で、インフラの整備が必要で、生活リズムが低い状況からどうやって引き上げるかという中にあった。今は状況が違い、官僚が自信喪失されている。民活というのは、みんな民になればと、国でやっていたのはみんな間違いで、民間のやり方にだけ誠意があるんだという

のが、戦後の日本及び、西側諸国のやってきた方法です。しかし、そのままいけるのか？雇用機会がなくなっていく状況の中で、世界を再編成するののかという局面にある。だから、70年代、60年代の話をしてあまり役に立たないと思うんですよ。

一方で、情報を集めると、おっしゃりたいことは、ツイッターなどで気軽に情報がまとめられ、それが束ねられれば新しい街作りができることは違うんじゃないかということかと思うのですが、何年か前かヴェネチアビエンナーレでイタリア館で、自分の好きな絵を、またはイタリアを代表する絵を市民に投票させるということをやった、その時の展示の風景というのが、お土産屋さんみたいな絵がいっぱい並んでいるような雰囲気で見ると堪えないという意見がある一方で、市の収集の仕方はだめで、今流行っているのがツイッターだから、ツイッターから全部情報を集めれば良いというのは違うと思う。といってもツイッターがだめというわけではないですが(笑)。官僚に頼れば良いのかというわけではないのですが、実際具体的に何があるのかと言われてもちょっと難しいかなというのが個人的な感想です。

**南後** | 一方でですね情報を集めると、多分おっしゃりたいことは個人的なTwitterだけがいいとかgoogleだけが良いかということではなくて、ビジョンを都市計画家、建築家が描いたときに、それが共感を呼べばそれで良いのですが、全然注目を浴びなかったりあるいはむしろひかれてしまうアクションもあるわけであって、そういうことを避ける為に少なくとも判断材料の一つとしてあるいはトップダウンとか思い込みを少し調整する上で一つの材料というかそれこそマテリアルとしてあれば良いかなと。もちろんすべてが解決するとは思ってなくて、セッション2がビジョンでセッション3が戦略ということで、そういう都市計画家であったり行政の人であったり建築家でも良いと思うのですが、そのような人々がビジョンが共感をよんだりとかどういうことができるのであるとか、あるいはそれをどう伝達していくのかどう拡散していくのかということに関して、例えば吉村さんであればこのまへのJAの日本都市空間、新しいバージョンでもダイアグラムとして示せますね。例えば昔から杉浦康平さんとかもやりましたけれども、単なる難しいデータをExcelのデータにするのではなく、変換、編集をするということによって、情報伝達されていくのかと思うのですが、どうお考えですか。

そして中島さんにも御聞きしたいのですが、伝達だけではなくて、知を蓄積していくということによって、継承していくものだと思っていて、そのアーカイブという問題が出てくると思うのですが、中島さんは東北でも計画遺産という概念を出されて、その都市計画が持っている過去の蓄積したインフラだったり、そこに国有されているような知というものを次世代に継承をするという活動をされていると思うので、そのあたりの法則的なビジョンみたいなものを伺えたらと思っています。

**吉村** | 僕がやっていることに最後結びつけるこ

とが出来るかどうかは分からないのですが、先ほどの意思決定するプロセスの話で、藤村さんがいっていた共感という言葉が重要な気がしていて、それはただ共感という言葉にすこしポジティブなニュアンスを重めにふりかけていくという感じで、田中角栄が共感を得られたという言い方は可能なのですが、どちらかというと裏日本の不安をベースにしている共感のような気がしています。そして都市計画を今語ろうとすると、どちらかというと不安を煽るというか北風を吹かすという話が前面にでてきてしまいがちですが、それに対して共感がでにくい状態にあるということに気づいた方がいいというようなことを思います。TwitterとかFacebookとかの“いいね”のような小さな共感の集積のようなものもあり馬鹿に出来ないんじゃないのかなと僕は思います。不安から共感を得るといって少し共感をベースにした都市の語り方をしないとなかなか現実の世界ではできないのではないのかなと思います。

でも何か議論のきっかけともなれば有効だと思うんですが、それを実現していく戦略ということを考えてとき、なにか不安をオープンにした共感ってのはなかなか難しいんじゃないかな、そういう時代になっているんじゃないかな？って思うんです。…うまく説明できないですね。感覚的なことなんで、でもたとえば僕と同世代の建築家があまり歴史のことを語らない、都市を語らないってことは、むしろ戦略なのかもしれない。どちらかと言えば良い意味での共感をベースにしてみても、その建物を建て続けるための戦略を持てるのかもしれないという気がしていて、不安を煽りだすと建物を建てる機会を逸していくような、そういうねじれがあるような気がしました。僕自身がどこの立ち位置にいるのかというと、正直曖昧な立ち位置で、先ほどのインフォグラフィックという、情報を可視化するための絵を使うというのはどちらかというと、不安を煽る側に片足を突っ込んでるのかもしれない。ただ、OMAとかもしかしたら共感側にシフトする何かだと思っていて、それは自分でも探りたいなと思っています。

**中島** | 何を話そうかずっと考えているんですけども、さっきからディジションメイキングの話がされてたんですけども、どう人々の意思を確かめるか、あるいは選択肢をつくるか、何を徹底するか、いろんなレベルの話があって混乱しているんですけど、言っていたいたのはアーカイブですね、アーカイブは何となく古いものをあつめるような認識だったんですけども、例えば10年前20年前とちがうのは我々が日々アーカイブしているというか、我々のログが残るってことですね、藤村さんはよくおしゃいますが、それはただのツイッターなどのログが残るのではなくて、その積極的にモニタリングという逆の観点で見たときに極めて精緻なモニタリングができる時代になっている。それを専門家でなく一人一人ができる。例えば放射能の問題でもかなり早い段階で全国のいろんな情報が上がって来ている。まさにデータが先にある。簡易なガイガーカウンターといった技術的な側面で支えられてモニタリングがすごく精緻にでき

るようになってる。例えば移動もおおざっぱな移動でなくフロムパーソンでそれぞれの行動記録から情報を得て次のアクションを考えることができる。それはすごい広がりがあるって、さらにそれが時間軸で延びて行くと、(われわれは当時歴史を研究していたので分かるんですが)古いものはほとんどPDF化されていて、いろんなものがアーカイブとして上がって来ている。今のであれば十年前にもデータが残っていていくらでもひきだせる。今は情報が多すぎるのでそれをどう整理するか、そこからなにをとってか。そこがすごい重要なんだけど、やっぱりその感覚がすごい変わっている

**豊川** | 整理というか何を重要なものとして選びとるのか。そのへんがプロフェッショナルの重要な部分なのかなと思う同時に、普通の人が見たとき感覚はすごく変わっている。たとえば、歴史の時間感覚に関しても今の人は自分の小さなころの映像が残った世代は、われわれよりもっと上の世代だけれども、その人たちにとっての過去、時間はだいぶ違う感覚を持ち始めている、デジタルカメラでもわれわれは小さいころ、デジタルカメラじゃなかったから写真のデータがまさにその何千倍と増えていく中で当然時間の感覚が変わってきたりして、計画を立てる人々の感覚も変わっているところは、すごく変わっているからそういうところをどのように読み取るかがすごく重要な話で、アーカイブって話だと一番の課題なのかなと。どう集めるかよりはその辺の方が重要だと私は思いました。

**南後** | 溢れかえった膨大な情報をどう集めるか。いかに選択するか。縮減するか。あるいは圧縮するか。わたしの方から一つ西沢さんの方に質問させていただいて、それから藤村さんにバトンタッチしたいと思います。先に吉村さんの方から吉村さん世代の建築家たちは一つの戦略から都市のことを語らないとおっしゃっていましたが、イントロダクションの藤村さんの時代区分でいうとマテリアル派という素材ということを追及している建築家としての西沢さんというのがおられると思います。さきほど触れましたけど、新建築で「現代の都市のための9か条」といことを書かれたり、都市に対して精力的な発言をされたり。今日のセッション1でも丹下さんというのは建築物ももちろんやっているんですけど、大きなスケールで都市の問題も扱ったり、あるいは国土計画まで扱っていた。という建築家を西沢さんから見るとどう映ったのか。どのようにとらえられてるのでしょうか。

**西沢** | 丹下さんは結構いい線いってます。彼の世代はどの国にもあいう方いて、その国の主要な国家施設を作って、一番有名な駅作って、広場作ってという人がいるんですよね。でも丹下さんの場合、世界史に残るような事件を、つまり原爆のための施設を作っていますしね。実力的にも東京オリンピックの競技場なんかも本格的でいいと思いますし、結構すごい人だなと。細かいところでいろいろいますけどね。そういう意味ではあの人がいてくれてよかったかな。

僕、今港の仕事をしてるんですけどね。港の地



区開発みたいなのでそれは瀬戸内海に面してるのですがその大通りがある市庁舎がぱんとありまして、600mくらい離れてるんですけど、その市庁舎と大通りは丹下さんの計画なんですよ。その道路が素晴らしいんですよ。

まず並木の位置が素晴らしい。パルセロナのカサミラの前にあるのと同じ形式なんですけど、歩道と徐行車が近くにある、60km/hぐらいの高速の車と徐行車両の間に、並木がある形式ですね。それはすごく良くて、いろいろ植生が変えられたり、歩道のペープが変えられたりいろいろしてるけど、まだエイドスは生きてて、つまりやっぱり歩行者の近くは快適で、徐行の車がですね、コンビニの車が停まったり、自転車が走ったりしてる。センターライン側のところは、人から隔離されて、まだ相変わらず港から駅まで重量車両がトラック運転して、ちゃんとデザインが機能してるんですよ。もうできて六十年くらいになりますけど、そういう意味でも丹下さんが軸にこだわったことには、僕は究極的には異論はあるのですが、でもよく考えてですね、けっこう長期的、まあ長期とまでは言えないですけど、五、六十年もつようなアイデアをちゃんと出しているんで、ああいう方がいてくれた良かったと思います。建築界として。

私の個人的話だとですね、僕は違った話してるつもりはなくて、ただ皆さんにはあの文章を読んで、私の作品を見ただけではわからないと思うんですが、でもおそろくいずれちゃんとわかるように説明したいと思いますし、ただ、そこをわかって頂くことが目的じゃないんで、別にそこは理解されなくても僕はいいと思ってもいるんですけど、僕が意識してるのは、環境オリエンテッドに考えていかなきゃいけないということなんです。近代都市計画というのはユーザーオリエンテッドであって、それを環境オリエンテッドなものにしていかなければならない。エネルギー問題なり緑地なりという意味での環境もありますけれども、あんまりこの話長くしゃうとあれかもしれませんが、要するに何故環境かっていうとですね、現代都市っていうのは、要するに元々をたどればですよ、十九世紀イギリス、その後、先進国でもそうですけども、お百姓さんたちを、土地から切り離して、低賃労働者にして住ませたと。近代産業を立ち起こしまして、近代建築をつくりまして、近代住宅に住ませました。これをやったのが近代都市計画ですね。でもそのままでは生存できなくなったというのが、今の現代都市の問題だと思います。

この人達みんなじゃあお百姓さんに戻るのかっていうと、戻れないんですよ。都市人口が35億人になっちゃいましたからね。で、その人達、どうやって暮らしていくんだと。どうすれば全体が35億人のスラムにならないか、これを考えなきゃいけないって、僕は人口流動性B型って言いましたけど、それに影響を与えられるのは環境だけだと思うんですね。人間って元々人口流動性だったし、環境オリエンテッドだったからです。

先始時代ですね、つまり。狩猟採集してる頃は、誰も私有物がなくて、美味しい水が飲めるところに、みんな地球の環境を共有してたわけで

すよね。作物がなるところに。それがそのまま現代都市でくりかえせるとは思わないんですけど、でもそれに似た事を現代の技術で、都市の中でやれると思います。環境オリエンテッドにすれば、何か国が破産したとかですね、資本主義だめになりましたとかですね、そういうことってさらにあるわけなんで、そういうときも、あのまにに行けばとあえず餓死しないで済む、そういう生存環境をつくれると思います。

人間は動物と違って自然界に放り出されるとすぐに死にますからね。生肉出されても食べられない。エネルギーがないと調理できないし、またすぐ凍え死んじゃう。じゃあ食料とエネルギーをどうやって入手したらいいのか。近代都市計画の回答は、お金がなければ賃労働者は入手できないようにしたわけなんですよ。でも資本主義が壊れるのは、僕は自分が生きている中で一回は壊れると思っている。資本主義が壊れる時のことを、若い人たちは知っておいたほうがいいと思うんですよ、あるいは国が壊れるときはどうなるのかっていうのを、知っておいた方がいいです。資本主義が壊れるっていうのは、ハイパーインフレーションと信用恐慌がありますよね。ハイパーインフレーションの場合は、消しゴム一個が一万くらいになる、そしてデフォルトになって今日から新円に移行しますと言われて、一千万円の貯金がいきなり無価値になりますよね。信用恐慌の場合は、結局は似たようなものですが、お金が交換手段にならなくなる。そういうことって何度も起こってますよね。ベルリンなんかは20世紀にハイパーインフレーションを二度経験してますよね。でもベルリンはそのまま生き続けているわけで、都市の寿命は資本の寿命よりも長いんです。そして国家よりも長いんです。東京を制圧している国家は現状の日本国が、今年で60年間ですよ。その前はアメリカが7年間、その前は大日本帝国が70年くらい制圧した、でもどれもこれも短いんですよ、近代国家というのは。近世の国家だともうちょっと長いとありますけど。近代国家っていうのはどうしたってそれくらい。ソビエト共産党がモスクワを占領したのも70年とかそんなもんですよ。短いです。人間の一生よりも短いぐらいなんです。だからそれが壊れる瞬間に、都市に住んでいる人はたくさんいるわけですよ。東京は少なくとも過去二回くらいは近代国家が崩壊してるわけですよ、主権者変わってますから、そんなときに右往左往しないような生存環境を国家が生きてるうちに、あとはまだ資本主義が壊れておらず交換経済がきちりしているうちに、作った方がいいと思うんです。そういうふうに町を変えていくべきだし、ついでにいうと農地もまだ経済もぎりぎり大丈夫で、空気もまだぎりぎり大丈夫なうちに、国からの税金を使ってもいいですし、企業からの投資をうけてもいいですから、それをつかって、国家と資本が壊れたあとも、みんな生きていけるような環境に街を変えていったほうがいい。だから環境オリエンテッドって言葉はすごく大事と僕は思っている、長期的に考えて。

藤村 | ありがとうございます。ここに座っているみなさんはさまざまなかたちで設計者として、大きくいえば、アーキテクトとして普段仕事にしている皆さんだと思うので、皆さんのお仕事をベースにして、観念ではなく、あくまで自分ならどうするということで、リアリティをもって語っていただいたと思いますが、例えば八束さんは、スコピエを例にだされて丹下研究室では、スコピエは実現しなかったともいわれるけども、大きくいて「かた」として実現されていったということ、奪還的に考えられていった、節があつて自分もそういうところがあると、自分の研究室でもそういうところがあつてといういいかたをされている。大野さんも大きく同じことを言っていて、比較的楽観的にいわれましたが、お二人は基本的には「かた」として残ればいいんだと残っていたように思います。それに対して、豊川さんは、かつての60年代をみると確かに計画者にとつての有利の条件がそろっていた。それが今、失われてしまったんだと、そういうことをおっしゃっていて、今はそんなときに新しい条件として新しい技術としてあるんだけど、はたしてそれがいいかどうかはわからないとおっしゃっていた。同じように変化の認識についておっしゃっていたのが中島さんで時間の概念を、記憶が残りはじめたとか、過去の記憶がデータとして残りはじめたという世代は、あきらかに時間の概念やさまざまな概念が変わり始めているはず、その概念が変わり始めたところには何かがあるとそういった主旨のことをおっしゃっていたと思うんですが。

お二人ともそういった時代状況の差から何かが生まれるんだということの中島さんは比較的是っきりおっしゃって、豊川さんは慎重におっしゃっていたように思います。吉村さんと西沢さんには対比の軸があつて、吉村さんはある種の不安のようなものに対して不安を煽るような何かビジョンを提示することを自分はやりたくない、小さな共感の蓄積を示すように物をつくっていけないかということをおっしゃっていました。

西沢さんはそれに対してどちらかというと不安を煽るわけではないが、国が壊れ資本主義が壊れるということを認識したうえで環境オリエンテッドに都市全体を考えていかなければいけないという言い方をされていたように思います。

今日は私がここに座って、お話伺っていて同時にtwitterをみているのですが、

昨年ここで磯崎新さんと東浩紀さんなどさまざまな方々をお呼びしてメタポリズム2.0という議論をしたことがあるんですけど、そのときの印象では磯崎さんが仰る通りに議論が分散してtwitterが炎上してさまざまな意見がふわつと流れていった。磯崎新さんがおっしゃるように結局ネットというのは延長するものであつて都市がかつて計画できない、コントロールできないといったのと同じで、議論もコントロールできない、ネットというのはコントロールできないという議論があつたわけですが、今年はそれに対してそうではないありかたでちゃんと議論しようということをやっていた結果twitterでも比較的しっとりとしていてあまり多くの意見がでて炎上するという感じではなく、わりと登壇者の方々の意見に対して個々人がコメントをされているというような議論の展開でした。ありがとうございます。





あとがき

## 列島改造論 2.1への想像力

2008年のライブから数えて4回目の議論の場、  
2007年のフリーペーパー創刊から  
足掛け4年以上に渡る「議論の場」は、  
この国のかたちを議論する場に至った。

自分たちが建築を学び、働き始めた当時の社会状況を再定義し、  
同じ時代を生きる世代の間で共有できる  
議論の言葉の在り処を探ろうとした『1995年以後』。  
14号を数える議論の中で、  
これからの、この国のこれからのかたちを議論することになった。

いわゆる2.0的歴史観を、「軽い」と喝破する向きもあるだろう。  
しかし、そもそもバージョンアップという思想には過去の歴史への、  
そして列島という表現には、  
そこに暮らすひとり一人への敬意が込められている。

それは、回顧でも断絶でもない、  
時間への畏怖の念そのものではないかと思う。  
時間という、ある種の動的な密度を  
内包した別のレイヤーを選択するということもある。  
つまり、私たちは、2.0を語ることで2.1以降を考えていることになる。  
南後氏という固有名詞を動かすシステムへの興味を、  
今後も継続して思考すること。

そのとき、列島は単なる土地を超え、  
多島海=アーキペラゴという領域として議論されることになるだろう。  
その想像力の源泉が

今日の議論の場であったなら、これほどうれしいことはない。  
どうかこのフリーペーパーを持ち帰るさなかから、  
次の言葉と行動が紡がれてほしいと思う。

登壇者、来場者、スタッフのおひとりお一人と、  
この場を整えてくださったLIXIL:GINZAのみなさん、  
そしてインターネットを介して参加された方々に、  
あらためてお礼を言いたい。  
ありがとうございます。次の議論に、ご期待ください。

山崎泰寛 | TEAM ROUNDAABOUT

## STAFF

東洋大学

[M1]

荒井允斗  
大山宗之  
森田幸雄

[B4]

白崎正剛  
塩原和記  
在原聡一  
金澤正人

[B3]

西村峻  
竹澤勇輝  
坂本匡平  
保科香里  
斉藤友美  
大庭みゆき  
小堀成美  
長谷川陵介  
今井浩太郎  
友国樹伸  
土田未優  
太田篤志

—

芝浦工業大学  
稲川大貴

—

東京理科大学  
新井潤

—

明治大学  
長谷川祥

—

早稲田大学  
大島萌  
長谷川駿

—

東京藝術大学  
中村慶子

## SPECIAL THANKS

株式会社LIXIL

LIXIL:GINZAの皆さん

佐藤敏宏



→P.02

するようになり、20世紀のように「右肩上がり」で成長することは21世紀には原理的にできなくなります。そう考えた時に、経済学では「成長しない経済政策は失敗だ」ということになっているけれど、それだけでいくと成長の機会が少なくなっていく。つまり「成長」を原理にしている限り、勝ち組に回れる人が少なくなる。社会が「縮小」を経済政策の失敗と考えるのではなくて、前向きに捉える論理を具体的に構築しないと、革命的な技術的展開がない限り減り続ける「成長」の機会をただ恨む世観を送らなければなりません。あるいは、「縮小」に対して、戦略を持っていないとただ恐れるだけになり、対応策がないと逃げるしかなくなってしまう。それは賢明ではないと思います。そういった理由から「ファイバースティ」では「縮小」について考えたいと言っています。日本は人口減少が、かなり極端に推移します。現実的には世界の先頭を切っていると言えると思います。なので、縮小していることをうまく捉えて、技術や文化や政策で新たなパラダイムを作れば、21世紀にヘゲモニーを握ることができます。20世紀の幕開けがT型フォードのアッセンブリー(組み立て)ラインと言われるますが、アメリカは大量生産だけしているのではなくて、ジャズも作ったし、ミュージカルも作った。ひとつの文化を作り上げることによって、非常に大きな経済的な繁栄を謳歌することができた。同じように「縮小」も日本が新しい戦略的位置づけをすることによって、新たな文化を作り上げればいいというのが私のスタンスです。

## 東京一極集中論は新陳代謝の機会を失う

**藤村** | そうすると、「ファイバースティ」は「縮小」の時代に東京がどという一種のケーススタディとして捉えればいいのかでしょうか。  
**大野** | そうですね。もうひとつ、いま日本の経済を見ていると新陳代謝が起こっていないという問題意識があります。新陳代謝の基礎は多様性にあります。例えば、あなたがコックでお台場と神田を比較した時に、神田なら裏通り

があって家賃が安いので店が持てる。そこで成功したら表通りに出て行くという成功ストーリーがあります。それが産業の新陳代謝です。かつて品川がHONDAやSONYを育てたのと同じように、ベンチャーを育てていくにはそういった都市構造が必要です。対してお台場は区画が大きくて、すべてのビルが大きいので、自分で100㎡の小さな事務所を構えることができます。ただ、どちらもどこまでコンパクトにすればいいかというと、全部東京に集めればいいという極論までいってしまいます。そこまで考えて一つの思考実験に過ぎなくなってしまうと思います。もともと、昨年ソウルに行って郊外を歩きましたが、韓国は今ものすごい勢いで選択と集中をしていて、ソウルとその郊外には韓国の人口の40%くらいが集まっているそうです。それが今の韓国経済の成功の原因でもあるとも言えるのかも知れません。もともと韓国の経済はサムスンなどいくつかの限られた財閥が牛耳っているかなり寡占的な構造を持っているので、すべての資本を首都圏に集めると当分の間は効率がよくなるのではないかと起きます。しかし、長期的に見ると新陳代謝を起こするような多様性をなくしてしまいうので、持続可能性を促めたいまうと思います。

また、もう一つは東京に集中すると、東京の地価や家賃が今のレベルで止まってしまう、地方都市は没落していく。その不均衡がいつまでも続くと、人口の逆流が起こるような気がします。企業立地で考えても、日本のようなインフラがあるところで、地方都市の可能性を全員が捨てると馬鹿じゃないと思います。地価が限りなく下がって、含み利益がなくなった時に、東京の優位性はどこまで保てるかなど、いろいろなことを考えると、単純な東京一極集

中論は、直感的には意味がないと思ってしまいます。

## 海外の反応/国内の反応

**藤村** | 先ほどの韓国の例は示唆的ですが、国によって集中論を選択したり、分散論を選択したりしていると思います。大野さんが「ファイバースティ」の発表後、諸外国でもレクチャーをされており、手応えはいかがでしょうか。国や地域によって手応えにばらつきはありますか。  
**大野** | それが意外と低いので驚いています。オーストラリアのような低密度なところでも関心を持つし、フロリダでも学生は関心を持ちます。地域による差はありません。あえて言うならヨーロッパは状況が似ているので、質問が具体的です。  
**藤村** | ヨーロッパは60年代から縮小の時代に入っていて、移民政策に関係で様々な政策を打ってきた経緯があると思います。日本では都市計画法による「線引き制度」があるといっても、現実には都市計画区域外に地区計画を制定して大型店が出店していたり、依然として拡大を続けている現状があると思いますが、日本の地方自治体で「縮小」のコンセプトを直接的あるいは間接的に実現している事例はありますか。

**大野** | まだそれほどないと思います。新潟県長岡市など、いくつかの自治体に関心を持って頂いて、研究の支援をして頂いていますが、現実には「線引きの見直し時には市街化区域を増やさないといけない」と苦渋に満ちた様子で話されます。現実には施設が余り、都市は縮小し、人口は減り始めているのに新築の物件は結構あります。人口が減っているといっても、若者は結婚すると家を建てようとするので、不動産業界もそういう需要を喚起すればいい。

ただそうすると、いろんな地区が放擲されるケースがでてくる。今までは空き家や空き室で残しておくことは効体なかったのが、土地価格がゼロに近づいてくると、土地を売ったお金で建物を処分できなくなって、そのままに新しいところに移ってしまいうように、アメリカの都市で起こっていることが日本でも起

こる可能性がある。

また、「シュリンキング・ニッポン」のなかでも指摘したように、少子化は不在地主をたくさん作ることになります。地方都市では誰のものかわからない土地が結構あって、地主は東京のどこかに住んでいるんだけど、処分することできない。近い将来、空き家にホームレスが住み着いたり、外国人が住み着いたりして治安が悪くなるといったことが今後地方都市、東京でも縁辺部では起こる可能性があります。それをどう管理するかという問題が都市の魅力をどう作るかという話につながってきます。

## 「縮小」の戦略をネットワークで展開する

**藤村** | ヨーロッパの郊外ではかつて50年代、60年代に開発された郊外のニュータウンがスラム化している事例がよく見られ、建築家によって再開発の提案もなされています。他方で、「縮小」を前向きに捉える論理を構築していく上で、縮小した方が良いということは様々な論理で説明ができるけれど、次第に限られた中心部の住民に対して集中して投資することを郊外の住民が受け入れ難くなって来て、次第にコンパクトシティ批判が強まって推進派が落選してしまうようなこともありませう。  
歴史的に見ても、八束はじめさんも指摘されるように、1960年代の丹下さんは集中論を唱えたけれど、自民党としては、地方都市の票を集めないといけないこともあって分散論を唱えてきました。工学的には環境や経済などという理によって集中論の理由が立つけれど、政策的には分散論を探らざるを得なかった経緯があると思います。そういったブラティカルなレベルでの戦略についてはいかがでしょうか。  
**大野** | そこが一番日本の政策の無責任なところ。最近では国土交通省が首頭をとってコンパクトシティを提唱しています。しかしついでの間まで、国も地方自治体も拡散政策を探って来ただけです。今さら急にコンパクトシティと言っても、中心にキャピタルゲインを作って、周辺にキャピタルロスを作ることはあり得ないわけですから。なので単純に都市の再編成は

できるとは思っていません。ただ、根本全体の総数でコンパクト化する前の地価総額とコンパクト化した後の地価総額を比べて、後の方が地価総額が増えているならば、再配分する機構を考えれば良い。  
それはまともなやりと証券化だと思います。今その研究を始めています。ハワードも同じことをやっていた「明日の田園都市」でフィジカルなことは最初の章にしか書いていなくて、あとはどうやってお金を配分するかについてひたすら述べています。あの時代は郊外が発展しようとする時だったので、出資者が集まりやすかったこともありますが、都市計画の根本は一人一人の「小さな損」を調整することで、全体として「大きな利益」を生み出す方法を考えることです。証券化は一般に都心の儲かる土地に適用されるものですが、再配分の仕組みとして、具体的にどう適用できるかの研究を始めています。今後はそういったことも合わせて提案していきたい。

**藤村** | 「縮小」を理念だけでなく、社会構造の中に具体的に位置づけるということですね。  
**大野** | そうですね。「ファイバースティ」は私たちのコピーライトというよりも、リナックス的にいるんなが参加しながら展開できたほうがいいと思っています。最近、ニュージーランドでファイバースティの課題を取り入れて、成果を送ってくれたり、ヘルギーでも取り組んでくれている人がいます。「ファイバースティ」というコンセプトのもとで、それぞれの地域の個性を反映するようない方がいいと思います。基本的に拡大期はユニバーサルでいい。一つ良い仕組みを考えて世界中でやりましようというのがアテネ憲章のコンセプトだったと思います。ただ、縮小期は基本的に資源が少ないのであるものを利用するで、手持ちのものが違つて個性的にならざるを得ないと思います。その顔は似ているけれど老人の顔は違うというのに似ていると思います。そのような多様性を共有するような仕組みをネットワーク型で実現できればいいというのが私の考えです。

2011年3月30日  
アプルデザインワークショップにて

→P.02

言えば、公害は分散し、地価は全国的に跳ね上がり、使われない道路があちこちにできた。それは通常は集中論の弊害とされているものです。つまり地方分散は必ずしも日本の国土にとっていい事態を導かなかった。丹下さんは「東京計画1960」を「東海道メガロポリス」へと拡大していったわけけれども、それは東京の機能を分散していくという話ではなくて、集中的に強大コントロールを行った都市環境を作っていくというヴィジョンだったんですね。彼はそれに対して自信があったと思うんです。  
具体的にはオイルショックがきっかけになっていったと思うけれども、そうした計画というかグランド・ヴィジョンを、集中論か分散論かも問わず、右から左まで寄ったかつて叩いた結果、1970年前後の丹下／メタポリストや全総のようなヴィジョンが失望していくことになりました。僕らの「近未来学」はその検証を意図しているわけですね。大体日本の知識人は、ネガティブとか批判的なことを言わないと知的でないと思ふ悪い癖があって、ポジティブなことをいうと必ず足引っ張る。19世紀の知識人像に未だにあらわれている。それはどうなんだろうか。

## 建築家と政治の関係

**藤村** | ただ、青森と鹿児島に新幹線が建設中で、列島改造論的なビジョンというのは未だに続いていますし、産業構造が転換しつつある今、それらを書き換える必要が出てきた時期かと思うんですが、当時の建築家と政治家のあいだで具体的にどのような交流があった

のかに関心があります。

**八束** | 極めて具体的な話をする、丹下さんは、全総に影響は非常にあったということになっているけれども、田中内閣の前の佐藤内閣の委員にはなっているにせよ、全総の懇談会の委員には呼ばれていない。なったのは黒川紀章さんで、彼は新全総とかの分科会に顔を出しています。ただ文章を作るのは役人だから、それがどくどく運動していたのかは今もご本人に聞く術がないのでわかりません。僕は本の中で、丹下さんの考え方をメガロマニア(誇大妄想症)に「ポリス」を入れて、「メガロ・ポリス・マニア」という呼び方をしたんですがすけれども、もともとは地理学者のジーン・ゴットマンの言葉からきている「メガロポリス」という言葉が1967,8年くらいに、すごいワームになるんで、一般ジャーナリズムなんかでも、それが1969年から――69年というのは「新全国総合開発計画」が閣議で批准される年ですけれども――転じて政治家たちの攻撃の対象になるんですね。僕の学生が調べたのですが、当時の国会答弁を読むと、「東海道メガロポリス」的な集中論を当時の閣僚たちがかに叩いているのがわかります。それからどうかは分からないけれども、新全総では「メガロポリス」という言葉は出てこない。

他方で、60年から70年にかけては、いわゆるシンクタンクがいっしょでいく。最初は国の外郭団体として、例えば丹下さんも拠点としていた「日本地域開発センター」が1967年にできます。「野村総研」もそのちょっと前にできますけれども、民間のシンクタンクができてるのは一般的に1970年くらいからで、黒川さんの社会工学研究所もそう。社工研の仕

事はあんまり知られていないけれども、高水準のリサーチやシミュレーションをしています。この面は評価されるべきでしょうね。それらはもともと1950年代にアメリカで軍事シミュレーションのために莫大な国家予算が民間のシンクタンクに投入されて、その技術が経済に流れて、さらに日本にも入ってきたものです。それが1960年代後半にうわつてきて、オイルショック以後あったという間に崩れていった、というかヴィジョンを失っていく。崩日本の社会的な関心が政治から経済のほうに流れてしまつて、予想が株価が今後上がるか下がるかみたいな話になってしまつた。オイルショックの後、余裕がなくなったということもあるんでしょね。予想という行為はヴィジョンの構築のためには不可欠なはずですが、それがヴィジョンなき予想になってしまつた。

## Super Egoとしての国家、Alter Egoとしてのメガストラクチャー

**藤村** | 八束さんの唱えるようなインブロージョンモデルを考えていくうえで、政治状況との関係をもとに考えればよいのでしょうか。

**八束** | 「インブロージョン」というのはかつての都市の爆発が郊外に延伸していく、つまりエキスブロージョンだったのに対して、今後はハイエリアを中心として内側にハイバデンシティ(Hype den-city)化していくというヴィジョンをいっています。メガ・コンパクト・シティともいえるけれども、僕にとってはコンパクト・シティというのは規模のことではなくて密度のことなんです。効率についても良いけれども、集積した方が効率がいい。地方都市で皆

が車に乗ってというのは効率が悪い、環境的にもね。  
政治状況との関わりですが、今回の本の基本的なコンセプトに「スーパーエゴSuper Ego(超自我)」というのがあって、これは森美術館で以前に開催された「アーキラゴ展」に僕が書いた文章に端を発しています。つまり国民国家というのは幻想共同体なんだけれども、それは自然状態としての民族として成立していかなくて、ある種の「超自我」としての制度あるいは共同体像を形成していかなければできない。その似姿として可視化された「アルターエゴAlter Ego」がメガストラクチャーであったり「全総」であった。そしてそれが見失われていくのがメタポリズムが失墜していく過程だったんだ。それと対比的にいうと、今のように身体感覚みたいなものだけで建築が出来上がっているのは、これと逆のイド、つまり無意識のほうに建築が流れていっている状態だと思うんです。スーパーエゴを欠いた建築というか、それは個人の話であれはいんだけれども、建築は純然たる個人の創作の対象じゃないはずなんです、そのところが僕には面白くない。けれども、正確に、僕も少なくともナショナリストではないし、今時スーパーエゴへのヴィジョンが日本が国民国家としてのゴールへ導くるといったわけではなく。けれども、ロングランのバースペクティブを持たないでは、建築作品を作っている分には良いとしても、都市のことは語れないのではないか。丹下さんからメタポリズムまでの歴史をつぶさに検証していくなかで、僕にはこういう見方が強い確信としてあるし、今日のグローバリズムの枠内でも

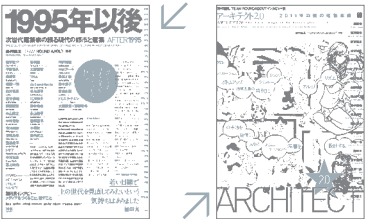
う1回今後の50年を考えていく必要があると思っっているわけです。  
もちろん今例えはドバイとか中国で行われていることを丸ごと認めるかというて僕にもたまめいはあります。そもそも丹下さんやメタポリストたちが海外に進出した時期の仕事をどう評価するかはすごく難しい。丹下さんは海外に進出していく時期に建築家としてのインスピレーションを喪失したというわけが一般的なんだけれども、そういう総括でいいのかと考えるを得ないんです。個人のその時期における創作力の問題は別として、そこには政治的背景のシフトもあったと思う。つまり、1940年から60年の日本が、一度目は植民地化、二度目は敗戦というアイデンティティクライシスに直面して「近代の超克」とか伝統論争が出てきた、それが伝統と近代の間で彼らの仕事にテンションを与えたと思うんですが、海外に出ていくと、例えば丹下さんを「世界の丹下」にしていた日本的なものとの両義性みたいなものは崩れて何を手掛かりに建築を作っていくのかわかんなくなっていくという問題があったのではないかと。これは歴史的テンションを失った「歴史以後」であるグローバリズムのアポリア(難問)だと思ひます。スーパーエゴにはもはや解答がなくて、イドだけが蔓延してしまっているのが今の状況かも知れない。動物的なポストモダンというて。僕にも答えはないです。ただイドの問題は量の問題に、あるいは政治の問題に答えられないと思っているので、すくなくとも自分ではそつちに行くつもりです。すくなくとも

2011年2月2日  
藤村龍至建築設計事務所にて



**1995年以後——次世代建築家の語る都市・建築**  
2008年2月20日発売 | エクスナレッジ刊  
藤村龍至 / TEAM ROUNDABOUT=編著

阪神・淡路大震災、オウム真理教事件が起こり既存のインフラの脆弱性が明らかとなり、windows95が発売され、インターネット元年と呼ばれる新たな情報インフラの存在が見え始めた「1995年」を起点にして建築家のあり方を考えようとするインタビュー集である。1995年前後に建築を学び始めた1970年代以降生まれの世代の建築家・社会学者・批評家ら32組にインタビューを行ない、問題意識の共有を図ろうとしている。刊行時点で藤本杜介が37歳、筆者(藤村)が32歳、再若手の大西麻貴が25歳であった。こうした世代論を入口にしたメディア戦略の構図は、かつて1960年代に終わりに雑誌「都市住宅」が刊行された時の状況に近い。当時、磯崎新が37歳、編集長の植田実が32歳、伊東豊雄、安藤忠雄らが27歳、元倉貫孝らが22歳であったという。若い世代で新しい変化の時代を切り取り、議論の場をつつていくという明確な意志があった。そこで本書では表紙裏に植田実氏への特別インタビューを収録し、当時どのような狙いのもとにかの雑誌が刊行され、どのような編集の戦略があり、デザインがなされたのか、植田氏の証言を収録した。植田氏のメッセージは私たちのその後のメディア戦略に深く影響を与えることとなった。



**アーキテクト2.0——2011年以後の建築家像**  
2011年11月10日発売 | 彰国社刊  
藤村龍至 / TEAM ROUNDABOUT=編著

「1995年以後」に続く、時代状況の変化とそれに伴う新たな建築家像をテーマとしたインタビュー集である。本書の狙いはまず、「情報化」と「郊外化」を1995年以後の建築・都市領域に起きた最も重要な変化の代表例として位置づけることである。そのうえで、そこで起きた建築家の役割の変化を見極め、問題意識を広く共有し、2011年以後の建築家の可能性を討議することである。ここではまず、かつて1970年大阪万博に設計者のひとりとして関わり、その後「都市からの撤退」を宣言し、1995年に「せんだいメディアテーク」のコンペで審査委員長を務め、その後「海市」や「証大ヒマラヤセンター」などのプロジェクトを通じて現代都市のグローバル化や建築設計の情報化を論じる磯崎新氏を、今日の建築家像をめぐる潮流の変化を体現する人物として位置づける。そして、1995年の変化を象徴する「せんだいメディアテーク」を起点に「情報化」と「郊外化」をめぐる建築家像の変化を様々な立場から検討していく。

2011年3月11日の東日本大震災およびその後の福島第一原子力発電所の事故は、今日の日本の国土の構造が持っている様々な課題、特に、交通ネットワークの脆弱性、地方都市の産業構造、エネルギー問題など、インフラに関わる諸問題を浮かび上がらせた。超高齢化社会が到来し、三陸の漁村のいくつかは、仮に復旧を果たしたとしてもすぐに限界集落となると言われる。40兆の税収に対して90兆を歳出する国家システムは、このまま対策しなければ経済的な破綻は目に見えている。原子力発電所の問題は中央と地方の政治的力学の非対称性を解決しなければ社会的に解決を図ることはできない。このように、今回の震災はこの国がもともと持っていた難問を突然顕在化させてしまった。様々な制度が林立し、利害が絡みあい、技術への依存を強め、コントロールを失ったまま自走しているこの国は、あたかも見えないアルゴリズムによって駆動しているかのようである。既に都市設計の領域では1995年の阪神・淡路大震災と前後して、行政がリードするトップダウン型の「都市計画」から、住民が参加するボトムアップ型の「まちづくり」が叫ばれるようになっており、今回もボトムアップ型の復興計画が各所で提案されているが、今回の原子力発電所問題が象徴するように、私たちの生きる「リスク社会(ウルリッヒ・ベック)」を経営していくためには、ボトムアップ型の意思決定だけでは不十分であり、自走するアルゴリズムをコントロールし、問題の解決を図る新たな意思決定のイメージが必要とされている。私たちが到達したのは、こうした新しい意思決定のイメージに関わるコミュニケーションの下部構造(アーキテクチャ)を設計する「アーキテクトとしての建築家」という建築家像であった。

LIVE ROUNDABOUT JOURNAL 2011

**「ライブ編集」というコンセプトのもと、会場にて建築家のレクチャー＋インタビュー、その文字起こし、レイアウトなど、取材・編集作業をライブ形式で行い、フリーペーパー『ROUNDABOUT JOURNAL』を即日発行するというメディア型のイベントです。**

**日時・2011年12月3日 [土]**  
**開場・12:00 | 開始・13:00 | 終了・20:00**  
**会場・LIXIL:GINZA 7F クリエイティブ・スペース[受付 8F]**  
**定員・100名 [申込不要・当日先着順] | 入場料・1,000円**

**主催・TEAM ROUNDABOUT | 協賛・株式会社 LIXIL**  
**協力・東洋大学藤村研究室**  
**関連URL = [www.round-about.org](http://www.round-about.org)**  
**お問合せ先・藤村龍至建築設計事務所 [担当・沼野井]**  
**TEL: 03-3476-6508 | FAX: 03-3476-6509**  
**E-MAIL: [press@ryujifujimura.jp](mailto:press@ryujifujimura.jp) | URL: [www.ryujifujimura.jp](http://www.ryujifujimura.jp)**

**レクチャーの内容は会場にて公開編集を行ない、ライブ編集版フリーペーパー『ROUNDABOUT JOURNAL』 vol.14として来場者に限定配布されます。**

**『ROUNDABOUT JOURNAL』は、建築設計、編集、デザインに関わるメンバーによって2007年3月に創刊されたフリーペーパーで、「議論の場を設計する」を合い言葉として、ブログと雑誌をつなぐオルタナティブなメディアによる独自の情報発信活動を行なっています。**

ROUNDABOUT JOURNAL (媒体概要)

**企画・編集・藤村龍至 / 山崎泰寛 |**  
**編集協力・伊庭野大輔 / 藤井亮介 / 松島潤平 / 本瀬あゆみ / 刈谷悠三**  
**デザイン・刈谷悠三 | 発行部数・5000部**

- vol.01 **「1995年以後の建築」** [タブロイド版/2007年3月発行]
- vol.02 **「1995年以後の都市」** [タブロイド版/2007年3月発行]
- vol.03 **「都市ビューティ革命」** [タブロイド版/2008年1月発行]
- vol.04 **「オルタナティブメディアは必要か」** [建築雑誌2008年1月号]
- vol.05 **「愛と力の関係」** [ライブ編集版/2008年1月発行]
- vol.06 **「続・愛と力の関係」** [ライブ編集版/2008年1月発行]
- vol.07 **「議論の場を設計する」** [Dialogue(台湾) 2008年4月号]
- vol.08 **「マイ・アイデンティティ」** [タブロイド版/2009年1月発行予定]
- vol.09 **「手の内側」** [ライブ編集版/2009年1月発行]
- vol.10 **「メタボリズム2.0」** [ライブ編集版/2010年2月発行]
- vol.11 **「アーキテクト・アーティスト」** [ライブ編集版/2010年10月発行]
- vol.12 **「決定の設計」** [ライブ編集版/2011年9月発行]
- vol.13 **「世界のあいだに立つ」** [ライブ編集版/2011年9月発行]

LIXIL:GINZA

**LIXIL:GINZAへのアクセス・お問合せ＝**  
東京都中央区京橋 3-6-18 〒104-0031  
TEL 03-5250-6560  
当日は LIXIL:GINZA は休館日のため、  
お電話によるお問い合わせはお受けできません。あらかじめご了承ください。  
<http://lixilginza.info/>  
営業時間 10:00-18:00 / 休館日 土曜・日曜・祝日・年末年始・夏休み



- 東京メトロ銀座線「京橋駅」1番出口より徒歩2分
  - 東京メトロ有楽町線「銀座一丁目駅」9番出口より徒歩3分
  - 都営浅草線「宝町駅」A4出口より徒歩3分
- 公共交通機関をご利用ください。



**大野秀敏 | Hidetoshi Ohno**  
1949年岐阜県生まれ。1975年東京大学大学院修了後、横総合計画事務所等を経て、1984年アプル総合計画事務所設立、アプルデザインワークショップ主宰。東京大学教授



**八束はじめ | Hajime Yatsuka**  
1948年山形県生まれ。1979年東京大学都市工学科博士課程中退。磯崎アトリエ勤務を経て、UPM(Urban Project Machine)設立。芝浦工業大学教授



**豊川斎赫 | Saikaku Toyokawa**  
1973年宮城県生まれ。東京大学大学院工学系建築学修了後、日本設計を経て、国立小山高専建築学科准教授



**中島直人 | Naoto Nakajima**  
1976年東京都生まれ。2001年東京大学大学院修士課程修了。2002年より同大学院都市工学専攻助手。同助教、イェール大学客員研究員等を経て、2010年より慶應義塾大学環境情報学部専任講師



**吉村靖孝 | Yasutaka Yoshimura**  
1972年愛知県生まれ。早稲田大学大学院修了後、文化庁派遣芸術家在外研修員としてMVRDVに在籍。SUPER-OS 共同主宰を経て、吉村靖孝建築設計事務所主宰



**西沢大良 | Taira Nishizawa**  
1964年東京都生まれ。東京工業大学建築学科卒業後、入江経一建築設計事務所を経て、西沢大良建築設計事務所主宰



**南後由和 | Yoshikazu Nango**  
1979年大阪府生まれ。社会学、都市・建築論。東京大学大学院修了。東京大学大学院情報学環特任講師



**藤村龍至 | Ryuji Fujimura**  
1976年東京都生まれ。東京工業大学大学院博士課程単位取得退学。藤村龍至建築設計事務所主宰。東洋大学専任講師

**山崎泰寛 | Yasuhiro Yamasaki**  
編集者。1975年鳥根県出身。横浜国立大学、京都大学大学院を経て、「建築ジャーナル」勤務。京都芸芸繊維大学大学院博士後期課程在籍 [松隈洋研究室]

**伊庭野大輔 | Daisuke Ibano**  
1979年東京都生まれ。東京工業大学大学院修了後、日建設計勤務

**藤井亮介 | Ryosuke Fujii**  
1981年香川県生まれ。東京工業大学大学院修了後、坂倉建築研究所勤務

**松島潤平 | Jumpei Matsushima**  
1979年長野県生まれ。東京工業大学大学院工学系建築学修了後、日本設計事務所を経て、松島潤平建築設計事務所主宰

**本瀬あゆみ | Ayumi Motose**  
1980年長野県生まれ。東京芸術大学、東京工業大学大学院修了後、隈研吾建築都市設計事務所を経て、ASDL 主宰

**刈谷悠三 | Yuzo Kariya**  
1979年東京都生まれ。大阪工業大学卒業後、東京工業大学研究生、アトリエ・ワン、schüccoを経て、neucitora 主宰

